「佐賀藩庄屋史料」（上）

― 杵島郡川古村庄屋記録 ―

長野　遲
満武初一

目　次

一、諸　控　帳
一、井手家文書
一、川古秀岩寺境内杉一件控……（以上　本　号）
一、解　題……（以下　十五巻二号）

凡　例

一、用字は基本的には底本通りとしたが、当用漢字のあるものは新字体で用いた。ただし、人名・地名など固有名詞については底本通りとした。
一、底本にある異体、異字、略体、古体、俗字などは正字に直したが、ゟ　〆　は底本通りとした。
一、変体仮名は、原則として平仮名に改めたが、而　茂　与　者　而已は小活字にした。
一、読点「、」および並列点「・」を付した。
一、校訂者が加えた傍注には（　）を施した。
一、底本にある敬意のための空白や改行については、底本通りとせず、前にある文字または前行に続けた。
一、底本の丁替を明示するため、紙面の終りにあたる所に「」をつけ、新紙面の行頭になる所に(1)のように、底本の丁数を示した。
一、上欄に項目番号と目次を記した。
一、虫喰いなどで判読不明の所には□を記した。

諸

控

帳

⑵ 第一項

坊の下川筋堀替の事

貞享弐年丑ノ三月、川古村ノ内、坊下川堀替、武雄方へ代地指出候筈書様之事

一七之助様御知行所川古村之内、坊之下こも副此方川座御候、右川御堀替被成度由御断ニ付而、此方代官木嶋源兵衛存ニ而指出被申候、右川畝歩ニ〆八畝七歩」御座候、此為代地七之助様御知行内、同所新川ニ而五畝拾六歩、不足所一万坊田地ニ而弐畝廿壱歩、御代官馬渡新助殿御存ニ而被指出候、尤我々儀も出合地床引合相済候儀其紛無御座候、為後日一筆如此ニ御座候、已上

貞享弐年丑　鍋嶋十左衛門私領川古村

三月十六日　　畑　関太夫

⑷

岡部七之助様御内川古村

庄屋　善左衛門殿　同村庄屋

孫右衛門

畑　平五左衛門殿　同

平太右衛門

同　五兵衛殿

右本筈有り

⑸

（空白）

⑹ 第二項

元禄元年御物成目安

元禄元年御物成目安前

一米弐百三拾弐石壱斗九升九合

内

夫料米弐石六斗六升弐合
但地米十石ニ付而壱斗三升懸リ庄屋前十六石除テ

當御代官大串八右衛門殿

御存

(7) 第三項

元禄元年類族改の事

一元禄元年十一月ニ類族改御座候

百姓何かし

父方何宗祖父何かし何宗父何ノ何かし
母方何宗祖父何かし何宗祖母親
父方祖父何宗何かし何宗父何かし
母方祖父何宗何かし何祖母親

何の何かし
女房

(8)

御直人・又家中・出家・山伏・百姓、何茂究様如右之立帳ニ而、御郡代二戸田善兵衛殿へ指上ケ申候事、庄屋形左衛門、同五兵衛、嗜久右衛門、村横目次郎左衛門、大庄屋川原十右衛門、右人数判形仕候、尤控帳御座候、日付十一月十五日帳奥上ケ之事都合」

(9)

男女何百何拾何人、内男何百何拾何人女
何百何拾何人、内何宗男女何百何拾何人
内男何百何拾何人女何百何拾何人

(10)

奥書之事

右者今度類族御改ニ付而、御書延（ママ）を以被仰渡候趣、我々懸り村中念を入相改候処ニ以前きりしたんころひ候者幷子孫其外」宗旨疑敷者壱人茂無御座候、若類族有之而後日於顕然者我々越度ニ可被仰付候、以上如右之奥書指上ケ申候

元禄元年辰

十一月十五日

右究之儀當代官大串八右衛門殿御存之事」

(11)

第四項

元禄二年御物成目安

元禄弐年御物成目安前

一米弐百廿四石壱升六合

内

夫料米弐石六斗四升壱合

但地米十石ニ付而壱斗三升懸り庄屋前十六石除テ

一米四石御加勢米被下候　當御代官

犬塚庄左衛門殿

御存」

(12)

第五項

元禄元年川古宿へ木戸構の事

一元禄元年辰ノ年、木戸構可仕由ニ而訴（訟）詔申上候書様之事

岡部權之助・同右近、知行杵島郡之内川古宿口江此以前木戸構御座候、其後者存立候者無御座、

(13)

相立不申候、左候得者今時分御高札御立被召置候、宿次(継)」郡継御上之御荷物等宿中江泊居申候割宿両口江番仕候、扨又物成等茂家々ニ有之儀ニ御座候、然処ニ往還之御衆大キ成竹たいをともし通り被申候而、火用心悪敷気差閊申候ニ付而、左右之構口ニ而竹たいのともし火を御断為可申ニ此段領主方へ相達、竹木を」申請召置申候条、右木戸構相立候様ニ御郡代方・御目付方江御次(序)而之刻可然様ニ御達シ可被下候、尤以来修理方之儀、此方ゟ可仕候、何茂宜様ニ奉頼候、

以上

辰ノ八月十一日　　庄屋五兵衛

同　形左衛門

川良十右衛門殿　　別當平五左衛門

當御代官楢村儀兵衛殿

御存」

(14)

第六項

郡継米に付郡代へ訴訟の事

元禄弐年巳ノ正月、郡継訴(訟)詔申上候書様之事

一地米四百弐拾壱石九斗壱升　川古村

内

除米四拾弐石壱斗九升壱合

大庄屋小庄屋除米

同拾四石八斗五升九合　竹木買料

合除米五拾七石五升」

(15)

(16)

残地米三百六拾四石八斗六升
四部役米ニ〆弐百四拾三石弐斗壱升
内
但除米三百石ノ内、百石ハ白石両郷ニ而除ク
除米弐百石　川古郷継除
残米四拾三石弐斗壱升
」

(17)
一右四拾三石弐斗壱升役米ニ而川古村地普請跡方ゟ請切ニ仕来り、郡継相調申候、然処ニ役米所川古郷並ニ諸」点役相調、川古村普請之儀者寄夫ニ而仕候様ニと郷中ゟ被申候、左候而郡次調申儀、其外問所御座候ニ付而御断申上候事

(18)
一右川古村地米四百弐拾壱石九斗三升ノ内、大庄屋小庄屋除米四拾二石壱斗九升壱合引而、残地米三百七拾九石七斗弐升、四部役ニ〆弐百五拾三石壱斗弐升、於以来ニ郡次除ニ被仰付、残」役米四拾六石八斗八升、此料米年々相渡シ候様ニ白石南郷へ被仰付可被下事

(19)
一如右之被仰付候上者川古村地普請之儀寄夫ニ而被仰付可被下候事

(20)
右之通り被仰付儀ニ御座候ハヽ、何とそ郡継相調可申候、若郡次難調時節者御断」可申上候之条、此段宜被仰上可被下候、已上

元禄弐年巳
壬正月廿八日　庄屋五兵衛
川良十右衛門殿　同　形左衛門
　　咤（久右衛門）
　　（次郎左衛門）

右ニ十右衛門奥点合被仕候而、郡代方へ指上申訴(訟)詔ノことく相語申候、

御郡代吉岡神五左衛門殿

筆者野崎助右衛門代ノ□

(21) 第七項 耕作用水引入ニ付て川古本部協定の事

本部村ゟ川古村之内ニ井手を上被申候ニ付而、深川形左衛門殿・吉島杢左衛門殿へ指出筈書様之事　但天和四年子ノ年

一本部耕作用ニ川古ノ内、井手を上ケ被申候儀、此間出入御座候、然処ニ最初之井手杭床ニ高井杭御打候儀、双方合」点之上、間所無之様ニ今度被相定候儀、某共慥見届、後日申分少茂無御座候

一右井手自分ニ切落シ、又ハ高メ下メ所を替申間敷候、但今度一篇者御上竹木ニ而井手を上ケ被相渡由、向後本部ゟ竹木修理等茂被仕候様ニ被仰渡承届申候、尤普」請被仕候刻者　某共出合双方間所無之様可申談候、今度御定之通得其意申候

(22)

一至時間所扨又川古不勝手之儀御座候時分ハ、筋々相達申上、御指図ノ次第ニ可仕候、右井手を上被申候儀、本川底高ク御座候付而土井内ニ井手を上、土井下石垣ゟ水くゝり」本川ニ落被申用ニ御座候条、土井修理仕候刻、関留水間無之様可申談候

(23)

右之條々少茂無相違様ニ可仕候、若疎之儀御座候ハヽ、某共越度可被仰付候、已上

天和四年　　川古村庄屋

二月七日　　善左衛門

深川形右衛門殿　同村嘜　平五左衛門

吉嶋杢左衛門殿　右同　五兵衛

(24)

」

(25) 右前書之通り幷井手床高サ之儀、御同前ニ見届得其意申候、以上

子ノ　大庄屋

二月七日　川良十右衛門

深川形右衛門殿

吉嶋杢左衛門殿

(26) 右筈之前廉ニ古川弥五左衛門殿ゟ案文被指出如此筈指出候ニと被仰候付而、指出申候筈書様

一本部耕作用ニ川古ノ内、井手を上ケ被申候儀、御見分之上、双方出合間所無之通り互ニ手形差出申候、併本部ゟ被申候ハ、本土井を土俵関被仕直候ニ付而以前之様ニ水くゝり不申」由ニ而土俵取除如跡方之被仕候而も間無御座候、石土手を上ケ被申候ハゝ、水くゝり申用ニ而候条、本部ゟ之如願ニ被仕候様ニ大庄屋川良十右衛門、本部小庄屋吉左衛門へ申談候条、左様ニ御心得可被成候、以上

(27) 右ハ古川弥五左衛門殿へ指出申候、年号日付之控無御座候」

(28) 第八項

元禄二年川古宿へ札馬設置の事

元禄弐年巳ノ三月札馬訴(訟)詔仕候訴状

一川古宿之儀、往還筋ニ御座候得ハ、唐津・平戸・大村其外ゟ使者飛脚被罷通候節、俄ニ馬用所之刻、彼宿馬継所ニ而無御座故馬無之通申分候得共、何とそ相頼候由被申儀御座候、其節在郷馬共指出漸ニ者用所相達申儀ニ御座候、依之札馬拾疋被仰付被仰□ニと先年御訴詔(訟)仕候得共、新敷被仰付儀不相叶由ニ而、訴状被指返候不及力罷有候、然処ニ北方宿札馬之内五疋被召上度旨訴詔(訟)申上候通り承知仕候、右札川古宿へ被仰付候様ニ筋々宜敷被」仰達可被下候、尤馬代銀拝借不仕

(29)

(30)

御定之除米ニ而申請候、於差免者馬持主名付重而差出可申候、已上

巳　　別當平五左衛門

三月十八日　　庄屋五兵衛

川原十右衛門殿　同　形左衛門

右弐ツ奥点合被仕候而筋々ニ上り札馬五疋相澄申候　」

(31)

第九項

和泉守様長崎道中川古川越の事

一卯ノ月五月廿八日、和泉守様長崎御通被遊候刻、俄ニ水出、川古川御渡被遊候儀不罷成候付而、村中之者不残罷出御用ニ相立申候、同六月四日御帰城之時分御立宿被遊候所へ銭五百文都合之者へ金子壱分御酒被下候様ニと御座候得共、為拝見候御返上仕候得共、押而被下候付而御請申上候事、尤御郡代方迄も」申上、右銭壱分大庄屋十右衛門方へ預ケ置、其後筋々申達候而ゟ大庄屋ゟ請取候様ニと御座候付而同月十四日請取申候事

(32)

第一〇項

元禄元年御物成皆済

一元禄元年辰ノ年、御物成米弐百三拾弐石壱斗九升九合皆済之儀

巳ノ八月八日ニ相澄申候筈有り

但同年ハ御加勢米少も無御座候　」

(33)

第一一項

元禄二年御物成皆済

一元禄弐年御物成米弐百廿四石弐升六合皆済之儀、午ノ八月十日ニ相澄申候

拂越米壱升有り

午ノ年御物成ゟ出ル

御加勢米四石有り

第一二項

(34) 川古本部両村境の捨水の事

一川古村と本部之境通茂不山と申」所本部村ニ懸り溝水道川古村之内ニ水はき有之候を土井ニ築、田ニ開き候而捨水所境ニ仕召置候処ニ、是を本部ゟ築切申候、左候へハ、此方土井ニさゝへ開候由捨□ニ付而犬塚正左衛門方ゟ三角七兵衛殿方へ、元禄三年午ノ春普請之時相談ニ而村境ニ捨水はき水道明ヶ被申、川古勝手ニ被成候事」

第一三項

(35) 郡継除米訴訟の事

一川古村郡次(継)除米三百石除来候、元禄弐年巳ノ年ゟ郡次(継)相調申候へ共、村中百姓殊外問所多御座候而相調申儀不罷成候付而、子ノ十一月ゟ訴詔(訟)申上丑ノ正月同三月迄数度御訴詔(訟)申上候、扨又庄屋咾佐賀御役方へ罷出、御詫言申上候付而今除米」八拾石被相増可被仰付候条、郡次(継)相調候様ニと御座候付而、壱ヶ年成相調可申由御請申上候、乍去料米之儀、先以當年ハ料米六石可被下被仰渡候、右之通被仰渡候儀、丑ノ七月廿三日成留權右衛門殿御方ニ而庄屋村役之者被召寄被仰渡候

(36)

一右ニ付而御郡代ゟ大庄屋十右衛門方へ書状」之写シ杵嶋郡川古宿郡継除米跡方三百石被仰付置候処ニ、百姓無人ニ而難相調由及訴詔(訟)ニ、郡次(継)指上候付而、郡代方ゟ被承合候処ニ除米弐百石被相増候ハゝ可相勤由致重訴候、依之詮儀(議)之上、大和殿御聞届今度」除米八拾石被相増、都合三百八拾石除米被仰付由候条、此旨筋々可被申渡候、以上

(37)

丑

七月廿日

(38)

石之通相澄候条可被得其意候、以上

(39)

丑ノ七月廿三日　成留權右衛門
川良十右衛門殿
本郡代
成富權右衛門殿
下郡代
牛嶋幸介殿
筆者
峯　源蔵殿
川良十右衛門
右代之時郡(継)次役澄
庄屋二左衛門
咾　五右衛門
庄屋善左衛門
咾　五左衛門
元禄十年丑ノ七月廿三日澄

(40)

元禄十五年午五月廿日供(洪)水ニ而川土井田作以ノ外破損御座候
一同年午六月十日供(洪)水ニ而右同断、但二番水
一同年大風吹申候七月廿八日ニ而御座候

(41)

第一四項
元禄十五年洪水大風の事

(42)

同年大風吹申候、日限閏八月晦日、但是ハ二番大風にて御座候、大風ニ相副又々大水ニ而候

(43)

一同年右四通りニ而、世間殊外飢饉ニ而候故、担(且)那様江御加勢米被仰付可被下候様ニ村役中ゟ御訴詔(訟)申上候、御上聞被遊、右年柄故御尤ニ被思召候由ニ而候、加勢米六石被仰付候、村中何茂」難有頂戴仕候、右之段以来為覚如此ニ控召置候、已上

(44)

第一五項 洪水跡普請の事

一元禄十六年未、右洪水ニ付、川土井数ケ所破損御座候、普請所為御見分御目付大城軍平殿・原次郎右衛門殿御両人御越被成、夫丸三千九拾六人被仰付候、未ノ正月廿八日ゟ諸郷ゟ夫丸罷出候て二月中ニ漸普請所成就仕候、以上」

畩　五左衛門
庄屋　善左衛門
元禄十六年未　村年寄九　兵　衛
二月晦日　御目付休右衛門
村年寄戸　兵　衛
御代官役　小林久内」

(45)

第一六項 大風大旱に付、御加勢米拝領の事

一宝永四年亥ノ極月十六日、馬渡甚六殿御使有、御加勢米五石御拝領之由被仰付候、何も難有頂戴仕候、右者両度大風扨又七月大旱ニ付而年柄飢饉ニ而村中ゟ今度御加勢米被仰付被下候様ニと、御代官役野口覚右衛門殿、庄屋形左衛門殿、村畩五左衛門、目付役吉郎平相頼、御屋敷へ御訴詔(訟)申上候、然者御家老中御詮儀(議)之上ニ而右之通馬渡甚六殿以被仰付候、為後年控置申候事」

(46)

年寄　吉右衛門
村目付　吉郎平
村咾　五左衛門
庄屋　形左衛門
代官役　野口覚右衛門

亥ノ極月十六日

(47)

第一七項
富士山噴火に付救援金納入の事

一同五年子二月、御触状被差廻候、今度富士山焼失ニ付而、武州・相州・駿州右三ケ国ニ右焼炭四寸五寸積り、三ケ国人民及飢難」儀之通御上被聞召上、日本国中ニ地米高ニ懸ケ、銀三百弐匁七分弐厘相納申候、百石ニ付而銀百四拾三匁五分懸りニ被仰付候、右銀子ノ二月晦日・三月朔日両日ニ御屋敷迄飛脚を以相納申候、但御公儀ゟ被仰付候由ニ而有増控置申候、以上

年寄　九兵衛
（龍右衛門）
咾　五左衛門
庄屋　形左衛門
目付　吉郎平
代官　野口覚右衛門

子三月二日

(48)

第一八項
武雄領地野畑開作の事

御訴詔申上候覚

一已前ゟ武雄御領地ノ野畑開掛作仕候処ニ、去年丑ノ暮地米ニ壱分半之役米被相懸奉得其意相納候へ

共、少分之儀ニ申上候儀迷惑之儀ニ奉存候、併少之渡世仕様」御座候条、已前之通被差免被下候様筋々各御年寄ら宜様ニ御取成シ奉頼候由、百姓中奉願候、以上

寅　　川古村庄屋　市右衛門

九月十二日　　同村　右同　形左衛門

弥次兵衛殿

辰右衛門殿

右者如此相認差出し申候、但曽テ村中ら存立御訴詔(訟)仕為申儀者ニ而無御座候、弥次兵衛へ辰右衛門方内証ニ而右之趣相願差出し候様ニと深々被申聞候故差出し申候ひかへノ事、以上」

但代官役田中惣兵衛代

寅　　庄屋　市右衛門

九月十二日　　形左衛門

畩　五左衛門

茂右衛門

村目付　次右衛門

吉郎平

(50)

(49)

(51)

第十九項

庄屋役替り帳渡しの事

形左衛門方ら役渡候事　但御代官役田中惣兵衛殿代也

一卯ノ正月廿二日ニ、七右衛門方へ庄屋役ニ相付申候帳相渡候、庄屋七右衛門と御座候、是者村目付役吉郎平、畩五左衛門、村年寄九兵衛何も出合候て釣合ノ上役相渡り申候、以上

宝永八年　　村年寄九兵衛
卯正月廿二日　　同目付吉郎平
　　同毘五左衛門　　」

(52)
第二〇項
郡継筈請代役の事

一丑ノ正月ゟ郡次筈(継)請三郎兵衛仕勤申候事、右者形左衛門極老仕候故、御郡方迄右之謂委細訴詔書(訟)を以申上候処、御尤ニ被思召上、右之通ニ而御座候、但庄屋役ニ相付居申たる郡次筈(継)請之儀ニ候へハ、形左衛門方ゟ役料米壱石三斗五升差出し雇分ニ〆勤申儀ニ御座候、然処七右衛門方役受取ニ付、跡方ノことくニ〆」三郎兵衛相勤被申候様ニと御座候而卯ノ年相勤申儀ニ御座候、以上
卯ノ正月廿二日

(53)
第二一項
次郎ケ谷堤井樋替の事

一次郎か谷堤横井樋堀替新ニ入申候事、正徳弐年辰三月普請仕候、郡代須古、中郡代吉田弥次郎、懸り奉行五田作兵衛ニ而候、佐賀奉行高取平次兵衛・光安久左衛門両人」、普請方目付大嶋半右衛門・梅崎加兵衛、已上

(54)
第二二項
庄屋交代の事

一庄屋役五左衛門ニ相渡り候之儀、正徳弐年辰正月十一日ニ帳面相渡り申候、毘役九兵衛、目付吉右衛門、村年寄覚兵衛ニ而候、御代官役野口覚右衛門殿御懸り内ニ而候、以上　」

(55)
第二三項
庄屋村役交代の事

一庄屋役之儀、辰ノ十二月廿六日九兵衛方ニ五左衛門ゟ帳渡シ仕候、其時御代官野口覚右衛門殿存之前候、則毘杢左衛門、村目付吉右衛門、村年寄覚兵衛・八兵衛ニ而御座候事

(56)

第二四項
正徳三年不作ニ付、御加勢米拝領の事

一正徳三年巳年村中田作損毛ニ付、百姓中ゟ御加勢米被仰付被下候様ニと御屋敷迄重畳」御訴詔(訟)申上候、担(且)那様被聞召上、年柄之儀ニ御座候故、百姓中為御介抱銀子ニ而四百目御加勢被仰付候難有由村中頂載仕候、則其年作掛り田数ニ懸ヶ割符仕候、御代官役大串源左衛門殿存、但壱反ニ付而銭壱匁四分五厘懸りニ而相済申候、以上」

(57)

第二五項
下村清水又道替の事

一巳二月三日下村ノ内、清水ノまた道替仕候、其時並酒壱斗五升代官野口覚右衛門殿存ニ而御加勢御座候、百姓中頂載仕候事

(58)

第二六項
庄屋交代帳渡しの事

一御代官役大串源左衛門殿ニ七月ニ野口覚右衛門殿ゟ被相渡候、庄屋役九兵衛代ノ事、咾李左衛門」

第二七項
御代官役交代の事

一正徳四年午ノ極月十三日庄屋役儀吉右衛門方へ引渡シ、本帳幷記禄(録)帳訴(訟)升大小相渡シ申候

御代官役馬渡官右衛門殿、村役者　年寄　覚兵衛
　　八兵衛
　　咾李左衛門
　　目付　五左衛門
　　さし　孫左衛門」

(59)

第二八項
幸介・重兵衛免租の事

一正徳四年暮屋敷上納相納申儀不相叶候、其段御代官役被聞召上、両人上納午ノ暮無米ニ被仰付候、

難在(有)頂載仕候、午ノ極月廿六日、以上　幸介(重兵衛)

御代官馬渡官右衛門殿　」

(60)

第二九項
不作に付、困窮者へ飯米下される事

一同五年年柄悪敷及飢饉候ニ付申上候処、乍憚御上ニも被聞召上、則飢飯米壱人前ニ八木四升宛被仰付候、右人数左ニ書載仕召置候、

妙貞△貞元△妙蓮△玄心△妙寿　与左衛門　李右衛門　はゝ△　はゝ△儀右衛門△甚右衛門△はゝ壱升(てる)　はゝ(幸介)△市兵衛

　　晩　李左衛門

　未ノ二月二日渡り　庄屋　吉右衛門

　〆米四斗弐升　村年寄八　兵衛

御代官御同人　村年寄覚　兵衛

　　村横目五左衛門　」

(61)

第三〇項
正徳五年不作に付、春落の事

正徳五年川古村之内、下村田方地米覚、兼而下村悪所之謂被聞召上為御憐愍ニ

　田数拾五町三段弐畝廿九歩

合　地米百六石五斗七升七合

　米拾石六斗五升　春落　但地米ニ壱分落米ニ〆未申二年地落米ニ被仰付候、右ハ小林久内殿・鶴九郎

右衛門殿両人御越、地元御改御詮(議)儀之上被仰付候儀其後無御座候、以上

(62)

小林久内

御代官馬渡官右衛門殿　　鶴九郎右衛門

第三一項　正徳五年中宿春落の事

一中宿分下地屋敷田野中宗金田松原
合四角地米四石三斗五升三合
懸り落米壱石八升八合　春落中宿分
但弐分半落米ニ被仰付置候年数二年
右同断、御代官馬渡官右衛門殿
右両人御越未ノ二月四日ニ被仰付候、已上

(63)

第三二項　正徳五年水道土井伐石に仕替の事

正徳五年未ノ三月十九日川古村普請方相調、其内餅田大道端なハて水道土井伐石を以拾五間石土井ニ仕候、但御目付鬼崎杢右衛門殿則御見分ノ上、夫丸被仰付候、其時御約束此土井何(向カ)三年ニ成就被成可被下由御申ニ而御座候、以上」
御郡代水町助右衛門殿と申候」

(64)

第三三項　飢饉に付、村中難儀の事

正徳五年未ノ春飢饉ニ付而御屋敷罷越候、村中難儀仕候条、御合力被仰付可被下候様ニと御訴詔(訟)申上候、御尤ニ御聞入被遊、未ノ暮三石御拝領被仰出由、川古ニ而被仰付候、諸人難(有)在頂載仕候」

(65)

第三四項

一同年目付役五左衛門相勤罷居申候、乍然難儀体御覧被届官右衛門殿ゟ被仰上、則為御介抱白銀廿

目付五左衛門白銀拝領の事

目拝領と被仰付候、難有頂載仕候事

未ノ三月廿八日　　五左衛門頂載

(66)

第三五項
不行跡の者追放の事

一在田山ニ同山ニ中ノ原村ニ作太夫・郡介・甚左衛門右三人不行跡之儀御座候ニ付而追放被仰付候故、両所へ参居申候、惣而弥五兵衛一家共ニ追放と被仰付候へ共、重畳御断申上」弥五兵衛同姥川古ニ罷居候、

第三六項
郡継筈請代役依頼の事

一正徳五年未年郡継筈請吉右衛門ゟ頼申候、三郎兵衛相勤申候事

第三七項
御被官に切米仰付られ候事

一同年御被官中廿八人御切米壱石四斗未ノ暮被仰付候之趣、御代官馬渡官右衛門を以被仰渡候、被官中何茂頂載仕候事、付リ当年ヨリ被相改年々右御切米被仰付段ニ候、已上　」

(67)

第三八項
伏戸大明神御宝殿再興の事

一正徳五年未十月五日ヨリ当所伏戸大明神御宝殿御再興始リ、大工五人、木引(挽)弐人、大工武雄ゟ右賄夫壱日ニ壱人宛村中ゟ罷出相勤申候事

第三九項
享保二年普請夫丸の事

一享保弐年酉普請方夫丸八百廿五人相勤申候事

(68)

第四〇項
享保十年大旱に付、御加勢米拝領の事

一享保十年巳夏大旱ニ而尤五月廿九日雨ふり其後日数六十日大旱魃ニ而、田畑悉旱損仕候」、依之、村中百姓難儀仕候ニ付而御代官馬渡官右衛門殿御心入を以、畑物成御加勢米として米壱石五斗被仰付難有頂載仕候

一同年之暮下村百姓別而旱損難儀仕候ニ付而、御代官官右衛門様迄御加勢米奉願候得者、下村百姓中へ御加勢米五石被仰付難有頂載仕候事

一同年之暮中宿百姓御加勢米奉願候得者是又壱石五斗被仰付難有頂載仕候　」

(69)

第四一項
享保十年普請夫丸数

一享保十年巳ノ春普請夫丸上下ニ弐千七百三十壱人ニ而相調申候事

第四二項
享保十年三月四日佐賀城天守焼失の事

一同年之春三月四日佐賀御城焼却仕候、尤火元片田江小路ニ住宅被成候加々良久五郎殿と申鑓之衆ニ而、其火上総様御屋敷へ飛、右屋敷焼失仕候而、其火御城二ノ御丸ニ付、其後御天子(守)迄焼失仕候、誠ニ前代未聞之事御座候故如此」書付召置候、右火事之時分者昼之四ツ時出火仕候而終日焼申候、其後も佐賀春中度々出火仕候而何も驚罷有候事

(70)

第四三項
享保十一年大洪水被害の事

一享保十一年五月廿五日大洪水ニ而所々井手水垣ハ不及申、川土井一通リ其外田作方破損仕、小川古扨又荒川原両所土井破レ、田地四段余り否ニ相成、尤三年否ニ被仰付候事　」

第四四項
享保十三年洪水の事

一享保十三年六月五日洪水ニ而、所々井手其外川土井悉破田、作方過分破損仕候

第四五項
享保十二年下村へ御加勢米拝領の事

一享保十二年暮下村百姓数年不作仕候而難儀仕候故、代官方へ御加勢米奉願候得者目荒之者ニ為御加勢と米三石被仰付候事

(71)

(72)

第四六項
大庄屋給加増の事

享保十弐年ゟ大庄屋給弐分増ニ相定候而、毎年米壱石三斗五升宛ニ而御座候事」尤大さし料入て

村庄屋　吉右衛門

未十二月十日　　咾　三郎兵衛

第四七項
代官交代の事

一享保十六年亥八月八日ニ馬渡官右衛門殿ゟ野口覚右衛門殿ニ被相渡候事

御代官役　庄屋　吉右衛門

村咾　三郎兵衛

村横目　千　兵衛

第四八項
次郎ケ谷堤井樋替の事

一享保十五年次郎ケ谷堤井樋替召置申候、尤奉行役原貞右衛門殿、御代官役馬渡官右衛門殿

庄屋　吉右衛門

咾　三郎兵衛　」

(73)

第四九項
空屋敷落米の事

一享保拾六年亥ノ年川古宿并ニ下村壱通リ明キ屋敷之儀、百姓中ゟ奉願候処ニ被聞召、上畑屋敷之儀者本成ニ被仰付、元屋敷之儀者御見分之上ニ而落米被仰付候、惣高落米八斗弐升七合帳面ニ控御座候、但シ御代官役野口覚右衛門殿、御検者小林久蔵殿・成留五兵衛殿」御見分ニ而御座候、

(74)

已上

庄屋　吉右衛門

亥十月廿六日　　村嘜　三郎兵衛
　　村横目　千兵衛

第五〇項
享保十七年大水に付否田改の事

一享保拾七年子ノ閏五年十一日大水ニ付而所々川土井以之外損田地否ニ相成候ニ付而、御代官役野口覚右衛門殿、御検者小林久蔵殿御越ニ而御見分之上、御改否所田数」五段六畝廿六歩、地米三石九斗八升三合、尤其内弐年否三年否取分ケ被召置候、已上

子閏五月廿三日　　庄屋　吉右衛門
　　村嘜　三郎兵衛
　　村横目　千兵衛

第五一項
郡継夫の事

一享保十六年亥ノ十月十六日ゟ同極月卅日迄郡継夫丸三ケ月ニ三口、合夫丸百七拾八人、尤馬数之儀ハ夫々〆テ弐人引ニ而、但馬数四拾六疋　」

第五二項
郡継夫の事

一享保拾七年子ノ正月十六日ゟ同七月卅日迄、夫丸数弐百三拾人、合馬数百七疋夫々〆テ弐人引ニ而二口合夫丸四百四拾四人也（但馬数百七疋）

第五三項
郡継夫の事

一同夫丸数五拾四人子八月十六日ゟ同卅日迄壱ケ月分、右帳面会所相納申候故控召置候、以上

享保十七年　　代官役　野口覚右衛門
　　庄屋吉右衛門

子ノ八月卅日　」

(77)

第五四項　享保十七年虫入り飢饉の事

一享保拾七年子ノ六月中頃ゟ大々虫入ニ付而、土田ニ相成候故、川古村壱通り御上御検見ニ而候、早田御検見ニ田数拾町五段御座候処ニ有米米七斗八升七合相掛り申候を、代官役野口覚右衛門殿候時取立候而御屋敷ニ相納申候、其時六月末ゟ米九拾三四匁ニ相成候、尤白米者壱俵ニ而も無御座、北国米伊萬里ニ参候而彼地ゟ買取申候、尤段々ニ而候、以上　」

(78)

第五五項　享保十七年収穫皆無の事

一享保拾七年子ノ歳川古村弐百拾石九斗五升五合地皆々土田ニ相成、御見分之上ニ而地米拾四石壱斗八升五合有米相掛り申候、夫ニ付而帳面之控召置申候　内七斗八升早田

子十月五日　村横目　千兵衛

村毘　三郎兵衛

庄屋　吉右衛門

代官役野口覚右衛門　」

(79)

第五六項　庄屋交代の事

一享保拾七年子ノ十月五日ニ庄屋役之儀、吉右衛門ゟ幸右衛門方ニ帳面相渡り申候、其時御代官役野口覚右衛門殿、村毘三郎兵衛、村横目千兵衛約合之上ニ而相渡り申候

享保十七年

子十月五日　」

(80)

第五七項
郡継夫丸の事

享保拾七年子八月十六日より同卅日迄郡継人馬夫丸数三拾弐人、馬数拾壱疋、但夫々〆テ弐人引二口夫丸五拾四人為念帳面ニ控召置申候

村吟　三郎兵衛
子ノ十月五日　村横目　千　兵　衛
庄屋　吉右衛門

(81)

第五八項
子年大飢饉の事

壬子六月初頃ゟ虫入不残土田ニ相成候由也
享保十七年子ノ年世上大虫入ニ付而御領中村々及大飢饉下々以外難儀仕候、其末子十一月中頃より及飢者多御座候而諸方往還筋ニ行倒仕相果申候、丑春三月四月迄ニ飢死者多扨々何も難儀之為□難筆紙尽之事、米直段(値)二月頃賣買銭弐百拾匁□」壱升買銭百四拾弐文三文迄仕前代未聞之参懸り御座候事

(82)

第五九項
川古村普請乞筈の覚

川古村普請乞筈之覚
覚
一夫丸八百七拾五人　幸右衛門方
同　千拾六人　与　兵　衛方
合夫丸千九百壱人
右夫丸御点役ニ相立候様ニ筋々御点合被仰請可被下候、但シ川古郷河古村四部役所寅ノ春寄夫ニ〆普請相整入切夫丸断」横帳ニ御座候、已上

寅ノ四月廿八日　庄屋　幸右衛門
庄屋　与兵衛
牟田市郎右衛門殿
右夫丸御點役ニ相立候ニ筋々御点合之上差出可被下候、已上
(寅)子四月廿八日　川古郷大庄屋
下田市郎右衛門
須古御郡代
小柳三郎兵衛殿

(83)

右夫丸御点役ニ相立候様ニ御点合之上差出」候断前ニ御座候、已上
(寅)子四月廿八日　須古郡代小柳三郎兵衛判
牟田權左衛門殿
竹田文右衛門殿
嬉野大膳殿
右夫丸入方致存候、已上　普請御目付小柳藤七兵衛判
(碇)　甚左衛門判
右入方致存候、已上
(寅)子五月廿七日　石丸嘉右衛門

(84)

第六〇項　郡継夫丸の事

一元文弐年巳十月5同(参)弐年午ノ九月迄川古村郡(継)次入切夫丸数八百拾五人控召置申候」

午十月六日

第六一項 代官交代の事

一元文三歳午八月朔日ニ御代官役之儀、小林久蔵殿ゟ林九郎次殿へ御替り被遊候事

庄屋役　幸右衛門
村咾　千兵衛
村横目　助右衛門

午八月六日

」

(85)

第六二項 庄屋交代の事

一同元文三歳午十二月十七日庄屋役幸右衛門ゟ吉右衛門ニ相渡申候、但御代官役林九郎次殿之時ニ而御座候

庄屋役　吉右衛門
村咾　善五左衛門
村横目　藤八
畔目付下村　久右衛門

午極月十七日

(86)

第六三項 代官交代の事

一元文四年未三月十五日御代官役」林九郎次殿ゟ小林久蔵殿江被相渡候故帳面ニ控召置候、已上

庄屋役　吉右衛門
村咾　善五左衛門
村横目　藤八

未三月十五日

第六四項
夫丸の事

一同元文四歳未春乞筈夫丸数
一夫丸数千七拾九人　吉右衛門掛り
与兵衛掛り

(87)

第六五項
庄屋役替りの事

庄屋、忠次郎ゟ代役を与次兵衛ニ相成申候、子十二月諸帳相渡申候、丑暮庄屋与次兵衛役替、代役源之進江被仰付、諸帳相渡申候事

(88)

第六六項
延享二年洪水の事

(延享二年)丑七月五日晩供(洪)水川筋以外相損申候、別而古勢河内川筋川土井皆以打崩シ、田数多ク相損、稠敷否田出来仕候事、右ニ付而御屋敷江御注進之末、御見分有之候、其末弐番普請御上筋江相願候所、為御見分御目付千綿伊兵衛殿并ニ此人御奉行三位五左衛門殿御越御見分御座候、極夫丸左ニ書載」仕候事

村横目　林右衛門
村吃　幸右衛門

庄屋　与次兵衛代

夫丸千百八拾九人ニ而御座候

右者二番普請ニ御座候得ハ、丑秋相調被下候様ニ再往奉願候得共、御領中供(洪)水同様之義ニ付而秋普請相願候而も相澄不申候、尤明寅ノ正月廿八日頃ゟ御普請御取懸リ御座候事

第六七項―一
延享三年前代未聞の大洪水の事

(延享二年)寅五月廿四日洪水ニ付而

其節御上役者堀部与右衛門殿御普請方頭人ニ而御座候、御目付福嶋久之進殿・渋谷彈左衛門殿、

(89)

会所御奉行田口庄七殿、其外小奉行副嶋太兵衛殿御越、御普請御調被下候事、但此洪水六七拾年以来稀成洪水之由年寄衆被申候、川筋稠敷打崩シ水損否田多ク出来仕候、夫丸凡四千位被仰付候、大河筋石垣川土井大崩之場所荒々書載仕置候、新ノ瀬井手下川土井凡三百間位打崩申候、此土井武雄夫丸受取ニ而新ニ築立堅ク申候、并打次再川土井数間打崩シ申候、淵ノ上川土井数間打崩申候、井手脇川土井数間」打崩其外荒川原川土井数間打崩シ申候土井外土井数間打崩シ申候、其外向田川土井数間打崩、其外」宕ノ口川土井数間打崩シ、其外古湯河内筋亦々不残打崩シ、平原川内右同断、其外小崩所数をしらす荒増シ控召置候、此節之洪水前代未聞之様子ニて、右丑寅両年洪水出来仕候、其節御代官木原弥次右衛門殿

寅六月（ママ）日　　庄屋　源之進代

村嘜　源太夫

村横目　喜右衛門

吉木伝兵衛

」

(90)

第六七項 庄屋源之進代役と交代の事

卯暮源之進病気ニ付而交代相願候処、願之通被差免、代役次郎左衛門方へ被仰渡、則諸帳相渡申候、其節代官小林久内殿也

」

(91)

第六八項 代官屋敷作事替の事

但本畝壱畝ニ而候得共、壱部半ハ先年与有之候故、紅葉木ノ元ニ相当居申候、扨亦源之進与之代地間割毎ニ廿八歩半宛間畠与差出被申相談ニ而候事

寛延四年未六月御代官屋敷壱畝右屋敷兼而家損居候ニ付而御作事仕替有之候、尤源之進新作事被

(92)

相調候所、家ノ浦無余地、殊ニ御代官屋敷極近所ニ付而源之進ゟ色々及相談、屋敷代地年々差出
替地相談相澄申候、右ニ付而何も立会」屋敷方相改、代官屋敷代地ニ源之進ゟ畝方廿八歩半被差
出候、代地受取御作事有之候事、其頃之御代官林卯左衛門殿代也

(裏)

右屋敷替地之義、岡部善左衛門様御聞届被遊候事也

未六月廿五日　　村咾　源太夫

村横目　喜右衛門

庄屋　武左衛門

吉木伝兵衛

(93)

第六九項
元代官屋敷源之進屋敷となり、物成懸る事

右代官屋敷源之進屋敷成、則上屋敷被成御物成懸リ申候、畝方廿八歩半也、源之進永代屋敷ニ相
談相済申候事」

第七〇項
次郎左衛門庄屋交代の事

一寛延四年未三月當庄屋次郎左衛門庄屋交代被相願、代役武左衛門相勤候様ニ被仰付、同月十一日
諸帳相渡シ御座候事、其比當代官林卯左衛門殿、村横目喜右衛門、咾源太夫、散使与四右衛門ニ
而候事

第七一項
寛延四年春普請夫丸極

一同未春御普請夫丸七百廿四人西武左衛門前

同夫丸　　東市郎次分

弐口〆夫丸

(94)

右御極夫丸ニテ候事」

一同未四月、御上役方御越之上、御普請御取懸り御座候、夫丸員数右ニ書載有リ、御上目附福岡伴右衛門殿郷ふしん方ゟ西原伊兵衛殿、奉行衆生田弥兵衛殿、其比御郡方次須古御頭人仁戸田又兵衛殿、中頭人西五郎左衛門殿御越、小奉行越八殿也、卯月末ゟ五月十二日迄日数十五日相懸り、御普請相整申候事、尤五月十五日大明神様江立願成就仕候、日数多相懸諸入方過半入目御座候、

未五月十五日　村咾　源　太　夫
横目　喜右衛門
庄屋　武左衛門代

(95)

第七二項打追の不作に御加勢米の事

御代官林卯左衛門殿代也

未春百姓打追之損毛ニ付而春落再々御加勢米奉願候所、為御合力御米三石被仰付候事、御代官林卯左衛門殿代

第七三項年号改正の御触廻状

寛延四年未八月年号相改御觸状相廻り申候、則宝暦弐年と諸帳ニ差出相改り申候事

(96)

第七四項麦作不作に付御加勢米の事

同年夏麦作以外損毛ニ付而御かせい米相願候処、百姓極難儀之余り懸り尤ニ被思召上、御合力と〆御米弐石被仰付候、何茂難有奉及頂載仕、則配當仕候事、御代官右御同人様代」

第七五項

宝暦元歳未秋御物成納米弐百八石四斗六升七合ニ而御座候、尤右者六分口米夫料米見出シ都合御

但庄屋武左衛門代

宝暦元年未秋御物成目安

納米前也、未十一月立紙目安出来立控置申候事

第七六項 郡継米別当源左衛門へ依頼の事

未春ゟ武左衛門方庄屋役被仰付候処、郡継別當源左衛門へ相頼料米壱石四斗ニ〆被相勤候、尤庄屋武左衛門ゟ御屋敷迄其訳ケ申上御吟味之上、源左衛門へ相勤候様申来候也

第七七項 宝暦二年申春普請の事

申春御普請夫丸九千四百七拾八人御積前ニ而御座候、御上役池田善八殿・高岸文右衛門殿御両人御目付也、郷普請方より新ケ江長右衛門殿、小奉行坂田八左衛門殿ニ而候、尤御普請取懸申二月廿七日ゟ同三月七日迄相澄申候

御郡代多久福地宇右衛門殿

当村代官右御同人代

第七八項 次郎ケ谷堤井樋替の事

宝暦弐年申春次郎ケ谷堤井樋替ニ付而夫丸九百人御積前入切也、井樋松木長サ九間三つきニ〆部替申候、尤古井樋朽損シ候故水引不申、水落シ諸道古ねくふく十枚余かぎ付ケ之杭木入申候、則申春部替相澄申候事、御上役者前ニ書載有り、大釘かすかい多入方有之候

第七九項 伏戸神社鳥居打損に付、建立相談の事

宝暦弐年申當所大明神鳥居去年八月大風ふき大木のゑだ落懸り、鳥居ヲ打損シ申候ニ付而、申六月十五日建立之相談庄屋村役頭々神主伊予殿所江寄集相談御座候事、尤郷内村々奉賀相談有之候事、其時節庄屋武左衛門・市郎次、中ノ川内庄屋半左衛門・菅牟田八六右衛門・中山善六・山

(98)

中八伴右衛門、其ノ外、川内村右衛門殿・甚左衛門殿當村頭々何も御立会凡奉賀銭壱貫六七百目位出来立申候、不足所段々観化奉賀有之筈ニ而候事、武雄庄屋長兵衛方被罷出相談澄候事

第八〇項

(99)

申の六月大風の事

一同申ノ年六月八日どようニ入申候、然処土用ノ内大風吹申候、則六月十日ニ而候、殊の外つよき大風ニ而所ニより家なとふきはき申候事」

(空　白)

(100)

第八一項

伏戸宮鳥居建立棟上の事

宝暦弐年當村氏神伏戸宮鳥居健(建)立荒増左ニ書載仕候事

寛延三年午八月以外大風吹、當所伏戸宮鳥居脇のいちいの木ノ大枝落懸り無拠鳥居破損仕候ニ付而、翌年未九月より鳥居健(建)立之相談相〆り、宝暦弐年申ノ九月十五日鳥居相立成就御座候事」

(101)

右鳥居石者作り道ゟ取レ申候、石屋ハ黒岩ノ弥市請合、惣日数百四拾五工ニ而相澄候、但鳥居永名書上留迄ニ右ノ日数ニ而相澄申候、尤初ゟ石や請合ニ付而賃銭壱日ニ付六匁、飯料黒米壱日ニ壱升壱合五勺宛、石屋江渡切ニ〆此方ゟハ賄迎も入不申構無之相澄申候事」

(102)

一鳥居棟上懸り物、左ニ書載仕置候

一塩俵　但五升入ニ〆　弐俵

一米俵　但六升入　弐俵

但酒三升入
一樽　　弐ツ
一木綿　　弐端
中頃
一鯛弐懸ケ
一浅苧　半斤
一銭四百文懸ケ申候
一まき銭三百六拾文
まき用ニ成ル
一同米壱升
右之物数相懸り申候
其外
太刀・鏡少々懸り申候、後ハ申請ケ取申候事
一鳥居永名書氏子中ゟ仕候事
一大鳥居石引ゟ成就迄東西夫丸凡八百人餘入候事、但年数六十一年目健(建)替申候由也
宝暦二年　　施主　宮司　伊豫　殿
申十月　　同　武次郎兵衛　心遣
庄屋武左衛門代
同　市郎次代

(104)

村咾　源太夫
（平次郎
両岡部様ゟ銀被差出候
銀　二百目　村咾　喜平次
（善吉代

右鳥居健（建）立相談氏子中村々少々奉賀仕、庄屋々々ゟ心遣仕、夫丸ハ前之通村々ゟ少しも無疎念情（精）入成就仕候事

(105)

第八二項　西春普請並椎池堤井樋部替の事

酉三月當村普請夫丸千

但當代官林卯左衛門殿御存、庄屋武左衛門代

酉春椎池川上ノ堤横井樋部替申候事、右御普請方ニ付而御上ゟ御目付福地弥兵衛殿、会所奉行野田与七殿、小奉行板谷惣右衛門殿・板部新右衛門殿其外御出ニ而井樋部替相調申候

酉春普請夫丸千弐百八拾壱人ニ而御座候

酉六月雨しけく田畑殊外損毛仕候、尤極損毛ニ而ハ無御座候事

(106)

第八三項　宝暦三年六月雨多き事

第八四項　庄屋交代の事

一戌三月朔日庄屋代役次郎兵衛江被仰付候、尤古役武左衛門ゟ前ノ酉八月ゟ折々御訴詔御詫言申上被置候故、漸當三月ニ代人相立申候、諸帳相渡り、次郎兵衛方諸帳受取被申候事

第八五項

一戌六月廿五日ゟ大旱ニ付而一番雨乞龍王様江罷登籠申候、其後大明神様江村中参籠三番雨乞氏神江

(107)

龍王様及び伏戸神社雨乞の事

相撲三十三番之願成就仕候、尤七月十六日近村寄すもう有之候、川古地一方ニ〆寄次第一方都合相撲凡百番計り有之候事、勿論大雨無御座少シ願印迄雨ふり申候事、」其節庄屋次郎兵衛、村役覚左衛門・平次郎也、東庄屋伊兵衛、村役善吉・甚内ニ而候、當年旱損所多く相見候

(108)

第八六項庄屋交代の事

一戌十月六日元庄屋次郎兵衛病身ニ付而役替被相願候処被差免、代役覚左衛門被仰付諸帳相渡り申候、尤病気為保養被仰免候、覚左衛門義當時庄屋相勤候様於御屋敷被仰付重々御断申上候へ共、時節柄御詫言不相立即日帳受取申候

其節代官大串文左衛門殿御勤被遊候也

戌十月八日控置候

」

第八七項別当宗念寺へ出頭の事

戌十一月廿七日宗門方被仰渡之由ニ而、宗念寺昼四ツ時罷出候様筋々ゟ御觸達参、當宿別當次右衛門日限之通罷出候処、大殿様御死去ニ付而宗門方被仰渡候儀明ヶ廿八日ニ相延申候事、其節別當病気ニ付而本部・川古両人判形弥兵衛仕候事

(109)

第八八項酒運上銀納入の事

當宿酒運上銀、中ノ川内村右衛門分入銀九拾三匁弐分判屋ニ持参之上、戌十一月廿九日多久郡方相納、受取手形請取夫弥兵衛罷帰申候、則受取者武左衛門方へ相渡召置候、為念控置候

戌十二月朔日

」

第八九項

戌十一月廿六日川古郷四部役所普請帳弐品、大庄屋分往還筋普請帳壱品〆帳数三品勘定所相納申

川古郷四部役所普請帳納入の事

候て、受取手形勘定所役人吉嶋武右衛門殿ゟ被差出、河古村江相渡申候処、手形ハ東庄屋伊兵衛方江慥ニ相渡置候、尤帳納者大さじ弥留次方也、為念控置候事

(110)

第九〇項 虫入旱損ニ付、御加勢米願いの事

戌秋虫入旱損ニ付而、極損毛田内証立会ノ上見分、前帳面を以御屋敷江御嘉(加)勢米相願申候処、」至極損毛田之分江御米三石五斗被仰付候由被仰渡、百姓中何も難有頂載仕候、且又都合大損毛ニ付而重訴書差出申候処、御當役大串文左衛門殿御執成を以、米弐石五斗被仰付、二口米六石被仰付難有頂載仕候事、戌十一月ひかへ置候

庄屋　覚左衛門代
平次郎
御代官　大串文左衛門殿代　」

(111)

第九一項 亥年虫入不作ニ付、御加勢米願いの事

亥夏虫入ニ付、御屋敷様江損毛之詫申上、御嘉(加)勢米過半被仰付百姓中割方仕候事、但米百姓中江凡六石但検見なしニ〆被仰付候事
御代官小林久内殿御懸被成候也

(112)

第九二項 子年大虫入に付き御加勢米願いのこと

子年又大虫入至極田作相損、右同御合力米六石被仰付候、尤御検見奉願候処、御嘉(加)勢米ニ而かり取一反納仕候様ニ付而右之通、尤米拾六石被仰付候　」

第九三項

丑年田畠十分ニ出来立申候、御上下共ニ大慶仕候、尤夏旱ニ付而雨乞度々仕候事、大明神江参籠

田畑豊作ニて諸人大悦の事

度々其以後菅牟田龍王様へ三日三夜参籠、大雨ふり諸人大悦奉存候事

(113)

第九四項 近年庄屋役交代の事

當宿庄屋吉右衛門交代被相願候処、伜忠次郎江戌年渡ル、子年与兵衛江渡ル、弐ケ年相勤又源之進ニ渡ル、丑暮帳渡シ有之候、御代官馬渡喜左衛門殿代也、寅年御代官役替り」代官木原弥次右衛門殿御勤被成候、其以後御代官役林卯左衛門殿御懸り被成候、庄屋源之進病気差出候故、代役次郎左衛門方へ相渡ル、尤卯年也、左候て卯ゟ未年迄次郎左衛門相勤候末、未三月ニ代役武左衛門被仰付相勤候、尤四年目ニ御断申上、代役次郎兵衛被仰付候故半年計相勤来処、病気ニ付、代役覚左衛門ニ被仰付、戌年ゟ丑年迄相勤、寅春庄屋次郎兵衛ニ被仰付、(寅)卯辰ノ三月ニ代役武左衛門へ被仰付候相勤申候」

(114)

第九五項 代官交代の事

年号宝暦十年辰年書載仕候故、荒増記之置候事

物落ニ付荒増書載仕候也、頃ハ宝暦初年之頃也

一御代官役林卯左衛門殿病気ニ付、代役大串文左衛門殿御勤被遊候、二ケ年御勤被遊候末、小林久内殿御勤被遊候、宝暦十年辰九月御代官小林久内殿交代ニ付而代役田中惣兵衛殿御勤被成候事

庄屋　武左衛門

村吃　久兵衛

同横目三郎右衛門」

(115)

第九六項

一次郎谷堤井樋宝暦十年辰春横井樋立井樋壱間ニ巻申候、但横井樋大松ニ〆仕替候得ハ、四拾五年

計ハ能有之候半及申候、乍然横井樋尻ノ壱次ハ小松木ニ而候得ハ、十年計後壱次計仕替可申存事

庄屋　次郎兵衛
目付　三郎右衛門
村役　久兵衛　」

(116)

第九七項
宝暦十年春普請の事

宝暦十年辰春普請先格之通寄夫被仰付相整申候、夫丸左ニ控召置候

夫丸千五百八拾五人　庄屋　利右衛門方
右同千四百七拾五人　右同　次郎兵衛方
合夫丸三千六拾人

右夫丸入切前ニ御座候、尤東御所殿氏堤横井樋部代ル、西次郎ヶ谷堤横井樋部〆替有之、諸御普請相整被下候事、御目付秀嶋李左衛門殿・大園徳右衛門殿、小奉行橋元祐右衛門殿也、」会所奉行壱人右御越也、郡方須古御勤内中頭人小奉行御出被成候事

庄屋　次郎兵衛
右同　利右衛門代
但次郎兵衛代役武左衛門

辰八月

(117)

(118)

第九八項
大虫入ニ付、油並びに御加勢米拝領の事

宝暦十辰夏大虫入ニ付而折々御屋敷へ罷出御詫言申上候処、油樽四丁被仰付百姓中へ配當仕候而田虫退ヶ候、乍然以外田作損毛仕、同九月百姓中ゟ御検見奉願候処、御時節柄ニ付而御加勢米百拾石被仰付候、其上油代銭壱〆目餘御上ゟ御合力被仰付候事、何も難有頂載仕候事為後日控置候也」

(118) 第九九項 本藩より上納米仰渡されの事

一同十月御上御差支ニ付而石懸ケニ〆米三升宛被相懸之趣於御屋敷被仰渡候、御時節柄とハ乍申上扨々何も百姓中奉痛入候事

宝暦

一夫丸　西庄屋　武左衛門

一同　東右同　利右衛門

十　二口〆夫丸

一同　西　同　人

一夫丸　東　同　人　二口〆夫丸」

(119) 第一〇〇項 地積改並びに大庄屋交代の事

宝暦十二年午春ゟ當村耕作用御普請方之儀、例之通寄夫を以相整申候、乍然御上筋ゟ右普請方之儀御郡方大庄屋江被仰付、御上御目附方御奉行衆方立会無御座候、地積方ゟ庄屋村役所之百姓共立会、坪々相改帳面差出候様」御筋々ゟ被仰付候、則午春其通ニ而寄夫被仰付跡方之通御郡方大庄屋山崎孫右衛門被相勤居候処、不計病気差出死去ニ付、御子息山崎勝次郎方江郷中村々ゟ見立願差出候処、願之通勝次郎方江被仰付大庄屋相勤候事」

(120)

(121) 第一〇一項 川古川大出水の節、大炊

一當村大往還筋川之事、但東春ノ井手下大水出、諸往来之人々及難儀通路不相叶折節、大炊頭様御通被遊候節、村中何も百姓共我も々々と人狩ニ〆出、深川ニ入爰限ニ相働、無難右殿様御駕籠渡シ宿入口川

頭様御駕籠渡しの事

上申候事

但前己午年別而虫入午年大旱損の末ニ付而

但未秋之米御物成之内ゟ

宝暦十弐年未春百姓及零落、田作相續不任所存、庄屋村役迄百姓衆願書被差出、御屋敷庄屋村役持参色々相歎キ候処、米七石御合力被仰付候、尤向五ケ年返上ニ〆相納候様被仰渡候得共、相續不相叶奉願候得者、御嘉勢(加)ニ〆被仰付被下候様深重奉願置候事」

(122) 第一〇二項 虫入旱損ニ付、百姓衆嘆願の事

(宝暦十四年)宝暦十三年申春御屋敷様去ル未十月頃(宝暦十三年)ゟ御作事思召被立、右作事新ニ御立替被相整、結構ニ成就被遊候、右者志岐新平殿と申人、當村地頭屋敷江近年出入被成ニ而右新ニ作替被成候、然処諸細工人渡銀不足之由ニ付、為調義(宝暦十四年)申二月九日ゟ當所御出被成候事」

右志岐新平様御越ニ付、百姓中より年限否所改之義、旧冬御越之節より被願居候故、則御改被成候、勿論年々否帳田畠定除帳明キ屋敷段下帳弐品、田方成定帳壱品并田方洪水ニ付年限否壱品都合帳数六品兼而無疎略様御本帳ニ相副置可申事、但御代官馬渡能右衛門様立会、御頭人志岐新平様右同

(宝暦十四年)申二月朔日　御屋敷帰り被成候事」

但定除其外年限帳前々委細有之候(且)

右諸除帳六本、担那様御印形被遊下候

申三月五日記之置候　庄屋　武左衛門代

(123) 第一〇三項 御屋敷様建替の事

(124)

(125)

村横目三郎右衛門
村咾　久兵衛
下村役甚左衛門

(126) 第一〇四項 下村役給米加増の事

當村内下村役先年ゟ凡年数十年計り給米ハ少分ニ而百姓仲間ゟ仕候、人柄無之給米壱斗畔目附料毎歳被仰付置」候旨村横目ニ相増被相勤候様ニ而数年右下村役相倒居候処、申二月志岐新平様・馬渡能右衛門様御越ニ付而百姓中庄屋村役ゟ先年之通下村役相立被下候様奉願候得共、其訳色々被聞召届相立候、則荒川居候松尾甚左衛門へ被仰付候事、右下村役給米壱斗ニ而ハ何某相勤候而も不足ニ而及迷惑段御詫言申上候得ハ」御上ゟ下村役ニ米弐斗御合力被仰付候段、馬渡能右衛門殿ゟ被仰渡難有何も奉存候

(127) 第一〇五項 宝暦十二年分上納米完済の事

宝暦十二年未暮御上納左之通相納候
(六部々米入夫料、但夫料米弐石六斗七升定来候)
納米　(以下空白)　」

(128) 第一〇六項 形左衛門遺族に上納米免除の事

申春當宿松尾清五郎親父形左衛門事、四五年以来前ニ相果候故、母壱人ニ而幼少者弐人〆三人家内難相立至極之閊ニ付而、御上納米壱斗七升弐合未進仕居候、依之馬渡能右衛門様・志岐新平様迄右之」咄申上候処、(且)担那様江右両人ゟ被仰上候処、右米御介抱被仰付之段、馬渡能右衛門様ゟ被仰渡候難有奉頂載候

(129) 松尾清五郎母

申三月四日

庄屋　武左衛門
村役中

」

(130)

第一〇七項
坊山へ新堤
築立の事

宝暦十弐年未(午)春願被申荒増控置候事

一近年大旱ニ付而下村之内旱損所多百姓衆及迷惑、栗はい原田方壱段餘之所ニ新ニ小堤壱ツ築キ申度由、村中ゟ村役を以被相願候付、御屋敷様江書付を以地床用之田方被仰免候様奉願候得者、為永々之願之通新堤築立候様ニ」被仰付候、右ニ付而ハ武雄領坊山之葉きわニ堤之水向キ可相掛ルと奉存、山方庄屋長左衛門方八太夫方迄相窺見候処、其身方之了簡ニ而ハ相叶間敷、此方ゟ願書武雄江被差出可然様被申候故、其通則書付差出候得者、御見分之上首尾能相済」申候彼御方ゟ構無御座候段申来候事

(131)

宝暦十弐年

本黒木籠十壱角栗はい原堤床用

(132)

四下　壱段五歩　新堤床用

米四斗三升九合　定除申春御改之上右米被相除候、勿論前未秋新堤築立之筈ニ而未秋御物成ヨリ被相除候事

(133)

申三月　庄屋　武左衛門代

御代官馬渡能右衛門様代　村庵　久兵衛

村横目　三郎右衛門

」

下村役　甚左衛門

右堤築立申春井樋部ル、成就之上此記録ニ乗セ置可申事

」

(134)

第一〇八項
天候不順にて虫入油拝領の事

明和二年、但當代官馬渡能右衛門殿代也、

酉田植五月廿日頃迄相整申候、然処當夏初廿日計り大旱ニ而候処、其後永々雨ふり候故、田ニ虫入り為虫除諸社江立願相懸申候、其末油奉願候処、御屋敷様ゟ以御憐愍を油御拝領被仰付候、尤油四斗餘ニ而御座候、則百姓中虫入所ふけ之分相控帳面之上、油相渡申候事尤高橋ノ油買入

戌七月

右油之儀ハ志岐新平殿ゟ御屋敷へ御相談ノ上被仰付候事

村咾　久片衛

下右同　甚左衛門

村横目　三郎右衛門

庄屋　武左衛門

」

(135)

第一〇九項
虫入大風にて田畑損毛のこと

明和二年酉十月田方損毛仕候而御屋敷様江願書差出候、然処虫入所田方ニ御合力米六石御加勢被仰付候、何も難有奉頂載候事、勿論當七月八月大風吹ニ而田畠大損毛畠作ノ内、大豆ハ種子なし、其外損毛田方晩田大損毛仕候、百姓難儀ニ御座候事

酉十一月

村役　久兵衛

村横目　三郎右衛門

庄屋　武左衛門

御代官馬渡能右衛門代

(136) 第一一〇項 上納未進者督促の事

酉十二月時節柄故百姓及零落、當御上納未進多迷惑相見へ申候、凡拾石餘未進御座候、尤十二月廿七日村役中立会未進百姓家を相廻り相極候へ共、埒明キ不申候、併代官馬渡能右衛門様御出被成候、庄屋村役中御供仕候而引當を取帳ニ書載仕罷帰申候、寒中大雨ふり申候

酉十二月廿七日村役中存ニ而記之　」

但シ明和三年戌春　」

(137)

(138) 第一一一項 大殿様楠観音堂へ御立寄の事

明和三年戌三月十三日（但丹後守様御代）當大殿様伊万里筋被遊御越候処、楠観音堂御駕籠立場御上役者古賀武左衛門様其外御見積り當村庄屋村役中ハ不及沙汰、大庄屋山崎加津次郎方御上奉行馬場徳右衛門様御立会之上出来立申候而、則十三日昼七ツ半頃大殿様御駕籠立申候、打節大雨ふり申候其節之坊守光明院（坊号泉乗院と申候）ニ而御座候処為御□代」銀子一包光明院へ御拝領被為仰付候、難有取納奉頂載候、其明ケ日御祝として當代官馬渡能右衛門殿庄屋村役中へ酒肴被振廻奉頂候事

(139)

戌三月十四日　村役中

庄屋　武左衛門代

吉木傳兵衛

馬渡能右衛門様代

(140)

戌三月十三日夜四ツ頃右御通御跡仕廻之御方様数十人當所東川其日昼ノ八ツ頃ゟ大雨ニ而川水相

(141)

増、人馬難通用仕折節ニ而、郷夫丸も前廉ニハ参居候得共、遅メ之事ニ而其時分罷帰居候故、當宿ゟ為川越数人罷出候而渡海首尾好相済申候、大庄屋山崎勝次郎方居合被申殊之外之御悦ニ而御座候、前書之通、郷夫ハ居合不申、先ッ何事も無之、此節之川越シ夫丸之者ニ」苦労分ニて酒壱升首尾計り大庄屋殿被相調御ふるまい也、所之夫丸赤被下候事

戌三月十四日記之置候也　庄屋武左衛門

(142)

第一一二項大雨洪水にて椎池川堤土井切レ普請御奉行へ注進の事

一戌三月十三日晩大雨ニ而洪水出候、然処椎池川堤土井切レ申候、右ニ付而村役を以其節郷普請方御奉行重松武右衛門様、小奉行横尾仁右衛門様折節伊万里郷へ御越ニ而注進仕候、其節之使村役久兵衛参候事　」

戌三月十四日　庄屋右同人

(143)

第一一三項川古村西内御蔵入となる

一當村方之儀先年ゟ岡部善左衛門殿御知行所ニ而御座候処、何之筋ニ候哉、去明和四年従亥十二月半途上り地相成、子春地方為御請取御蔵入役者吉原政右衛門殿其外御越被遊、其節東岡部幸吉郎殿内ゟ工藤伊左衛門殿御立会之上地床御引渡御座候、翌年丑四月田畑割方」御座候、御検者頭人塚原治右衛門殿・原弥惣兵衛殿・藤崎勘兵衛殿・増田弥兵衛、御目付香月政六殿、従者入テ七人御出被成、日数廿日餘御懸り被成、右割方相〆候処、地米七石七斗七升六合出来本地米弐百拾石九斗五升五合、弐口合地米弐百拾八石七斗三升壱合相成候事

附當郷大庄屋之儀、蓮池御私領勝ニ付、脇村へ御蔵入無御座ニ付而」御物成一通之儀者伊万里郷大庄屋ゟ御筋々之御達被相達儀御座候、尤御点役其外之儀者以前之通當郷大庄屋ゟ諸事被相

(144)

(145)

達儀御座候事

明和六年

丑四月　　庄屋　覚左衛門

「　　茂平次

（甚左衛門

村横目　久兵衛

但川古郷大庄屋御点役方

山崎孫左衛門代

但伊万里郷大庄屋御物成方

前田善五左衛門代

」

(146)

第一一四項
楠観音泉乗坊記録の事

當村楠観音泉乗坊記録之事

楠森之儀ハ往古除之場所ニ御座候処、然処當村岡部領ニ相成候故、為御祈祷而楠森押迫上屋敷八畝拾五歩被遊御寄附難有頂載仕候、誠ニ名高き霊地ニ而御座候故、地頭筋ゟ永代御免地ニ被仰付候事、然処領主善左衛門様代去明和四年亥十二月御仕組ニ付、東西ゟ五畝歩之処五ヶ年御取替被遊、御物成被相懸候、泉乗坊茂不及自力指上候事、尤参詣之砌先御尊札前ゟ但横七尺長九間半ニ相定置、各々立会之上如是記置者也

明和七年寅五月

庄屋　喜左衛門代

」

(147)

(148)

第一一五項
郡継覚

一當村先年ゟ郡継被仰付相調来候所御点役郡継所覚左ニ

一地米四百弐拾壱石九斗壱升

内

除米三拾三石七斗五升三合　小庄屋前

同　八石四斗三升八合　大庄屋前

同　八石三斗五升九合　竹木買料

合除米五拾石五斗五升

(149)

但六ツ割、弐部ハ地頭役、残り四部点役

残役米三百七拾壱石三斗六升

本役米弐百四拾七石五斗五升六合

郡継除米三百八拾石

内米弐百四拾七石五斗五升六合引

残本役米百三拾弐石四斗四升四合

(150)

料米拾九石八斗六升六合六勺　但百石ニ付而米拾五石宛ニ〆

庄屋吉右衛門・同太兵衛役内、尤郡継難相勤御断申上候処除米五拾石御嘉増(加)被仰付候由

料米七石五斗

右ハ除米五拾石分

合料米弐拾七石三斗六升六合六勺

右料米毎歳白石南郷其外諸郷より被相渡候、以上

(151) 右先年之書物ゟ写留置申候、尤御点役米且又郡継料申請候勤越ニ付、除米前書之通被仰付料米申請候儀ニ御座候、為後年如件

」

(152) 第一一六項 旱魃にて田畑損毛の事

一当年田方植附之儀五月廿七日八日頃ゟ仕懸、六月十日頃迄不残植附相仕廻候処、大旱魃ニ付田畑共損毛仕、尤水たまり所之儀十分出来立、乍去六月初頃ゟ七月末迄尤閏六月有凡及九十日大旱魃ニ付上ヶ田一通其外谷々端々損毛仕、百姓中迷惑存、尤風之気色も無之候故」、水掛り所之分ハ大介実申候事

明和七年

寅八月　　庄屋　喜左衛門

茂平次

（甚左衛門）

村横目　久兵衛

」

(153)

(154) 第一一七項 公料巡見使通路の事

一公料巡見上御通路ニ付而、宿中家修理、道作、往還筋土持普請方ニ付而、申暮ゟ翌酉春郷普請方御役々御郡方被御出、重ヶ郷内村方庄屋村役ハ不及申ニ百姓中迄殊之外隙費有之候事、尤御通路之儀酉四月廿五日田辺仁左衛門殿・押山甚五郎殿、御歩行目附川崎市三郎殿右三人上下弐拾七人佐賀ゟ星野源蔵殿其外附廻本部宿摺継ニ而戸坂峠御駕籠立、塚崎御休ニ而彼杵泊其ゟ段々長崎表御巡見之上、国々公料御巡見之事

(155) 寛政元年

酉四月　　咾　橘右衛門
　　村横目　久　助
　　庄屋　藤兵衛　」

(156) 第一一八項　申年洪水並びに巡見使通路につき普請の事

(天明八年)
一申五月廿八日同六月朔日洪水ニ付而、田方洗剥出来、川土井崩所多、西春御普請之儀安外之夫丸(案)入方ニ而、殊ニ公料巡見御通路ニ付而往還筋普請御役方宿中へ入込ニ付而、郷普請御役方坂田尉平殿・大嶋良平殿・熊畑市左衛門殿・牟田喜三郎殿酉四月十三日朝5御出普請御取懸被成候、旅宿之儀則村咾橘右衛門宅」御宿被成候、然処四月十七日朝大嶋良平殿不計急病差発、御死去被成候ニ付而其段郷普請方御達申上候得共、御巡見方ニ付而郡目附衆御出無之暫延引仕、同月廿六日郡目附石丸吉蔵殿御出被成候得共、大旱魃ニ付而長池堤水落シニ付彼地御越被成、當村御普請方へハ下目附横尾徳兵衛殿御出被成、五月五日迄普請相済申候事　」

寛政元年　　咾　橘右衛門
　　酉五月　　村横目　久　助
　　庄屋　藤兵衛

(157)

(158)

(159) 第一一九項　酉六月十五日洪水にて古場川内被害甚大の事

(寛政元年)
一當四月5旱魃ニ付、田作不相整段々雨乞仕候処、五月廿一日能潤ニ而大方水田ニ相成申候、則廿七日八日頃5田作植懸、水田之分六月七日頃迄相整申候得共、端々迄皆作不相成、然処八日5雨ふり」十一二日之頃迄皆作相済申候処、十五日以之外之洪水ニ而、奥古場川内其外川付洗剥出来候事

酉六月　　村役　橘右衛門
（久　助
庄屋　藤兵衛　」

（160）第一二〇項十郎右衛門様旧領弐百五拾石拝領の事

一当村之儀、前書載之通御西内岡部善左衛門御代無調法有之、御知行被召上御蔵入ニ相成居候処、去ル明和七年寅夏當十郎右衛門様御用ニ付御登城被遊候処、弐百五拾石御拝領被仰付、則寅秋之儀御知行代米御筈入ニ而高木御屋敷御相續被成、翌卯秋川古村地米弐百拾八石七斗三升壱合、神埼郡小津ケ里村地米三拾壱石弐斗六升九合地床相渡、則卯秋御屋敷ゟ右両村御支配被成候ニ付、春落并諸役給米扨又普請入方寺社上米先善左衛門様御代之通被仰付候様書附を以奉願候処、則跡方之通諸事被仰付、左候而卯秋之儀ハ夫料米被差免候事、尤御代官田中弥右衛門殿、手傳高嶋利蔵殿被相勤候　」

（161）

卯十二月　　庄屋　幸兵衛
村咾　久兵衛
村横目　三郎右衛門

（162）第一二一項滝右衛門唐津領にて横死一件始末

一辰秋庄屋役幸兵衛依願交代被仰付、喜左衛門相勤罷在候処、當村百姓孫之充伜瀧右衛門唐津領罷越候処、不計致横死、大黒井手東しからみ流懸り」居候趣高札書記、小坂原江相立居候由専風聞有之候ニ付、辰十月十三日右瀧右衛門他出仕候処、数日不罷帰候ニ付而近隣之村々相尋候処、右高札書記相違無之ニ付其段御筋々御達申上候処、下目付村岡勘右衛門殿・堤弥右衛門殿御出、當

(164) 郷大庄屋山崎孫右衛門方ゟ之書状ニ〆唐津領大河野大庄屋竹内勘右衛門方」木下杢右衛門方折々御懸合有之候得共不相知候ニ付、郡御目付大塚伊十殿・青柳卯左衛門殿御出取合被成候得共一圓差分不申、御請役所江御目附方ゟ御達相成、佐嘉ゟ久米弥兵衛殿・森川八郎右衛門殿其外桃川宿御出唐津役人御出合被成候上、御双方書状を以数度取合有之候得共、右瀧右衛門横死ニ合イ候」相人被相知御請役所御吟味之上、一類共ゟ唐津領罷越、死体請取此方ニ葬候様被仰達、則一類ゟ川原村庄屋段蔵江釣合死体堀出シ持帰葬申候、尤下目附堤弥左衛門殿其外瀧右衛門一類之由ニ而御出被成候事、勿論右一件御詮儀(議)半ニ御目附方ゟ大川野大庄屋宅御出之砌、近村之者共為聞合彼地罷越候様御噂被成候ニ付而、當村之者ハ不及申伊万里郷中」より大庄屋前田善五左衛門其外罷越候故、唐津領川原村御番ニ而何村何某と控置、数百人徒党之様ニ書附、日田御代官所江訴訟申上候趣ニ而、差咎り之様ニ佐嘉御請所申来候故、評定所御調ニ相成、當村ゟも数人評定所罷出候得共、無調法ニ者不相成候得共、前代未聞之儀ニ而、右唐津御懸合之筋ハ、佐嘉御役方當村ハ端近キ場所ゆへ武雄湯町正法寺浦之庵ニ御宿被成候ニ付而、瀧右衛門一類庄屋」喜左衛門彼地江数日相詰罷在候事、最初下目附村岡勘右衛門殿・堤弥右衛門殿御宿之儀ハ當宿松尾覚左衛門宅、庄屋元江者多久御郡方附役三ケ嶋次郎右衛門殿足輕両人召つれ数日御逗留被成、其末又々宮崎郷助殿御出辰十二月迄御逗留被成候、翌巳春ゟハ御郡方立会之儀無之候、唐津領ニ而瀧右衛門打ころし候者博奕等仕候者荒増存居候由ニ而桃川村へ罷越居候を」召取、武雄大庄屋庭木弥三左衛門方宅江相預、番人昼夜相附居、段々申語始終共御懸合有之候処、右之者被召返候ハヽ埒明候様可仕旨唐津ゟ申来候趣、巳春則川原村庄屋段蔵迄當宿市郎兵衛、武雄足輕原友之允其外四人右之人数罷越引渡申候、其日多久御郡方ゟ足輕峯權左衛門・中山新蔵弥首尾熊(能)相渡候哉と、當所迄御目附青柳信右衛門

(165)

(166)

(167)

(168)

(169)

殿」御差図有之候由ニ而一宿被致候処、其夜五ツ頃市郎兵衛・友之進其外被罷帰庄屋宅一宿ニ而、翌日双方共ニ被罷帰候事、辰十月ゟ巳夏迄右一件ニ付而ハ佐嘉御屋敷ゟも役人田中弥右衛門殿其外折々被罷越、村方ゟも夫丸費多村方迷惑相成候事

巳六月　　久兵衛
　　村横目　三郎右衛門
　　庄屋　喜左衛門

」

(170)

第一二二項
人別竈帳差出の事

辰年御改正ニ付人別竈帳差出候様、御手本大庄屋山崎孫右衛門方江相渡申候ニ付、人別竈帳色々六ケ敷儀ニ而庄屋村役筆者手を込相調御郡方差出申候処、東西弐品ニ〆ハ帳面不宜段執行貞兵衛殿被相達候ニ付、則佐嘉御屋敷ニ而御西ゟハ大串文左衛門殿、御東ニ而草場大左衛門・神代勝十殿御立会、東西地米四百弐拾九石六斗八升六合、人数八百六拾何人之帳面筆者治右衛門罷越、数日致逗留相整、山崎孫右衛門方人改松尾善之進方印形之上、多久御郡方石井安兵衛殿奥印ニ而御役所被相納候事、初而之儀ニ付過分入方有之候、荒辻控召置候、以上

」

安永弐年　　東庄屋　市郎兵衛
巳四月　　西庄屋　喜左衛門

(171)

(172)

(173)

第一二三項
庄屋交代並びに献金の事

一巳秋庄屋喜左衛門交代被仰付、代役勝十江被仰付相勤居候処、御上御差支之儀ニ而下々ゟ献上金差上候様被仰付、其頃郷横坂井政之允と申人相立居、手當稠敷不得止事と頭百姓中ゟ貫立金弐両武雄」御郡方相納申候事

巳十一月　　東庄屋　太兵衛
　　西庄屋　勝　十

第一二四項 人別銀上納の事

一御上御差支ニ付、午暮人壱人ニ付銀壱匁宛被相懸稠敷御手當有之、村方ゟ色々御詫言申上候得共御聞立無之、少しも無遅々相納申候事

午十二月　　」

(174) 第一二五項 人別銀上納の事

一御上差支ニ付、未年ゟ人壱人ニ付銀三分宛月々被懸候趣ニ而、正月ゟ四月迄一切人壱人前銀壱匁弐分宛差上申候、尤七歳未満之童子共相除、残人数江年中ニ積り銀三匁六分宛相懸諸人及難渋候事年久敷、庄屋勝十代、翌役覚左衛門代迄六七ケ年相懸、諸人及難儀候事　　」

(175) 第一二六項 米筈通用の事

一安永九年子秋御米筈被差出、壱升札四拾遣ニ被仰付置、数年御領中ハ不及申ニ隣国迄致通用、諸人持荷ニ不相成候故、前々有之候銀札遣ゟハ勝手宜世上専申唱事ニ候、然処近年作方損毛勝ニ付萬物高直ニ有之、直段(値)不相應有之趣ニ而、申秋御米筈ゟ壱升ニ付五拾文遣ニ被仰付候、　　」

(176) 第一二七項 領中千人講禁止の事

一同年ゟ御上御差支ニ付、第一と申者を千人講と唱、御領中江郷被相立候、右場所之儀者本庄町・高尾宿・神埼・千栗・小城・白石南郷・宝嶋・成瀬・有田皿山・伊万里郷小式原ニ而数年有之、御上御悦喜ニ相成候由専世上申唱候、併御家中市町郷内村々端々之者迄及迷惑候者数不知、然処當酉夏御巡見」上使御通路ニ付、去申十二月末迄諸方千人講之郷相止申候事

寛政元年

酉九月十六日荒辻記之

(178)

第一二八項
森天満宮拝殿建立の事

一當村森天満宮社之儀以前ハ拝殿無之、御神体石佛ニ而小ヰ小倉ニ而御座候処、當宿喜左衛門存立ニ而安永年中午未之頃ニ而も可有御座哉、弐間三間之拝殿建立仕候、則宝殿之儀拝殿江作付、御神体奉請」戸平を立召置候、末々無疎修理相加候儀要用之事ニ候、尤拝殿建立ニ付而ハ毎年御屋敷ゟ米三斗宛被差上候を庄屋預置、其末米三石頼母敷講仕、右を村方借入ニ而少々ハ田地等相調修覆用相立置申候事

(179)

第一二九項
伏戸大明神社修覆の事

一當村氏神伏戸大明神中殿拝殿及破損候故、十年以前ゟも其心當ニ而材木等囲置、年柄悪敷有之候候得共」村中申談修覆午春仕候事

一右氏神宝殿戸平木座橋相損居候ニ付、去ル未秋北嶋村右衛門殿ゟ再色修理(建)被相加候事

一右氏神宝殿家臺至極相損ニ付而、東西庄屋村役頭々申談之上、家臺健(建)替御座候事

天明八年申三月　東庄屋　左　平
西庄屋　清　次　」

(180)

第一三〇項
寛政二年洪水の事

一寛政弐年戌五月廿六日洪水、同六月九日大洪水ニ而、川土井井手破損之儀者不及申、田方過半洗剥相成候ニ付、則御屋敷ゟ御馳走米反米被相除被下度段筋々被遊御願被成候ニ付、御検者方ゟ御見分有之、田数弐町八反九畝拾歩、地米弐拾三石壱斗九升弐合之所、消切御見分前右地米ニ相懸

候御馳走米反米相除候、尤庄屋次郎兵衛代也、但御見分役杉町左馬助殿・土山三左衛門殿再見、御頭人江副傳三郎殿、郡目附」森又左衛門殿、検者喜多又三郎殿其外御出、旅宿之儀吉木傳助宅併桃川ゟ御出被成御酒差出候得者横辺田迄直々御出被成候

戌十一月五日之事也

(181) 第一三一項 洪水破損所普請の事

一洪水破損所うつきなみ松木その井手脇湯淵其外秋普(請脱カ)相願則御東内迄双方夫丸五千計入切ニ而普請相整申候、奉行水町半次殿、小奉行諸嶋平十殿、郡目附小森市郎右衛門殿也」

(182) 第一三二項 岡部十郎様川古へ御引越の事

一御領主岡部十郎様御差支ニ付、佐嘉ニ而相續不被為叶ニ付、戌十一月廿六日當地御引越相成、御借宅庄屋次郎兵衛母隠宅新屋ニ御住居被成候、則亥春多ち江御造作被成、村中ゟ色々世話仕候事、寛政三年亥三月庄屋次郎兵衛代也

(183) 第一三三項 洪水にて古場大ぬけ崩れの事

一寛政三年亥五月度々洪水之末、同六月十日頃無類之洪水ニ而井手川土井破損之儀」不及申ニ、川土井所々及切度就中奥古場大ぬけより崩下り、古場川内川端田方へ石築隠し湯淵迄洗立瀬ニ相成、大川筋ノ水太ク寺田土井外大ふけ小ふけ通葉山洗剥ニ相成、井手脇屋ふノ本上下中ゟ石井手松木そのうつきなみ大茂洗剥相成候、御屋敷御差問之上、右之通水損ニ付而ハ相続不被為相叶ニ付、則亥秋上御支配御願相済、御検者方ゟも上見分、初而目論見として熊野三左衛門殿・川原李右衛門殿御出、地改として」福所藤次兵衛殿・松野忠蔵殿御出、再見御頭人江口喜惣次殿、郡目附今泉新兵衛殿、下検者萩原次五右衛門殿、其外下目附古賀和兵衛殿御出被成候、庄屋善助代也

(184)

(185)

第一三四項
寛政四年春普請の事

同年子春普請夫丸御東内東而双方八千人之御割方ニ而御普請被相整候、奉行水町半次殿、小奉行古賀吟兵衛殿、郡目附石丸吉蔵殿、下目附亀川文助殿閏二月十一日ゟ御出、廿日迄被相整候、惣体往還筋入テ」壱万百弐拾弐人之夫丸御積前ニ御座候得共、世間悪敷、諸郷出夫難渋ニ相成候趣ニ而、右之通ニ而少々之場所被相除、差競候場井手水道普請相整申候、以上

子閏二月　　咾　橘右衛門
　　村横目　藤兵衛
　　庄屋　善助　」

(186)

第一三五項
寛政五年ゟ文政七年迄日記紛失の事

一寛政五年ゟ文政七年迄凡三十年餘此方日記致紛失、其間之儀何事ニ而も相知不申候、文政七酉春見出候ニ付、其後覚へ之分荒増致書載置物也、但岡部造酒様御代、庄屋千蔵代也

文政七年　　川古西分村
酉仲春　　役中　」

(187)

第一三六項
副島太郎兵衛本田交換の事

一天保七申正月十八日中ノ内、本田之内野中四反三畝三歩、屋敷田三反七畝三歩〆田数八反六歩取除、永代ニ〆差出候様、副嶋六郎兵衛殿御相談有之候ニ付、其通承知相〆り候、尤右ハ悪田与申古場田ニて候得ハ、何程哉加勢致呉候様相談ニ付、壱反六畝六歩加勢幷申年夫丸弐拾人、酉年夫丸弐拾人差出候様申談ニ相成候、右ニ付代地六反四畝請取ニ相成候
右永代取除之義役中致存候

申正月　　庄屋　寛平　㊞

村役　仙　蔵㊞
与　民㊞

(188) 第一三七項 下村本田間割の事

一同年七月村役与吉宅ニ而下村本田間割有之、其節右六郎兵衛殿御相談有之候者屋敷田へ下村本田壱反六畝之処永代取除致度由ニ付、何レも承知ニ相成候右ニ付壱反六畝代地差出被成候

右永代取除慥ニ致存候

申七月　庄屋　寛　平㊞
村役　千　蔵㊞
与　吉㊞」

(189) 第一三八項 天保九年村方定

天保九年戌暮惣百姓吟味之上、村方一統左ニ書載之通相定置候事

一村役両人庄屋宅詰ノ節、飯料居宅饗養、尤上御役御客之節ハ役宅飯料、但兼而飯料之儀者明暮米壱斗五升ツヽ相増候事

一惣百姓村寄方其外雨請等之節ハ酒相停止、役々同様ニいたし候事、但田祈祷風祭之節ハ、東西之儀ニ付、少々御神」酒等者可有之候事

一散使之儀ハ是迄米五俵ニ而仕来候得共、小々の小遣等ハ庄屋ゟ相倒候而、大仕たる事而已相勤候通ニ相定候ニ付、五俵之内壱俵相省、残四俵ニ而相勤候事、但相省候壱俵庄屋宅諸職用ニ料ニ相定置候事

戌十二月廿三日」

(191) 第一三九項 点役庄屋御仕組の事

天保拾壱年点役庄屋之儀、御仕組ニ付皿山代官所ゟ東西之点役庄屋三太夫江被仰付、給庄屋之儀茂岡部宮内様ゟ御直ニ被仰付候ニ付、則御請仕首尾能一ヶ年相勤申候、其時之代官野口仁兵衛殿ニ而御座候

(192) 第一四〇項 賃借拾五か年賦徳政の事

天保拾弐年暮ニ横辺田御代官所ゟ賃借之筋、御領中一通拾五ヶ年賦之御觸達ニ相成、村方御上納未進之儀も拾五ヶ年賦、村方其外構方之儀者半銀之取引申談仕候得共、能年ニ相成候へ者四ヶ一之取引相成候事」

(193) 第一四一項 伏戸大明神社社殿修理の事

一弘化弐年秋伏戸大明神大損ニ相成候ニ付、村方役々者不申及、川内村其外懸り内庄屋中打寄吟味之上、板敷其外修理方相成申候、東分庄屋清治、西分庄屋仙蔵代、武雄領庄屋栄蔵代、凡瓦修理之儀者小川三太夫ゟ寄進ニ相成、大工頭之義者亀右衛門世話致」

(194) 第一四二項 総被官人長崎警備出動の事

一弘化弐年巳秋、小姓惣被官長崎早速立為入用正銀百匁ツヽ年々拝領被仰付候様被相達候、右者別紙帳面幷銀之儀満武清治殿存ニ而庄屋預り相成候、尤吟味扨又長崎方ニ付、御屋敷迄数人罷越候入方、外ニ正銀弐拾四匁拝領被仰付候得共、少々不足相見候ニ付、右百匁之内左ニ相見候分銀前断ニ御座候

(195)

一銭七百八拾文

右者御屋敷江被官中ゟ御年玉

一同八百四拾五文

右者正月十一日入方

一同三百七拾文

右者長崎方ニ付被官寄入方

一同四百八拾文

右者同断

〆銭弐貫四百七拾五文　庄屋佐七代

〆　七貫九百弐拾五文　」

(196) 第一四三項 加地子米収納禁止令

弘化三午九月、皿山御代官所ゟ被相達候次第左ニ書載相控候

一加地子米取納之儀、去ル寅年一般取止相成候処、當掛り内幷七浦諌早筋之義様子相替り幷米等ニ取納来候得共、其通ニ而ハ一般之支ニも有之、第一身分柄不相當之」取納筋ニ付、今般開地古田無差分一般取納不致様、惣而右ニ掛り候田畑之義ハ、矢張是迄之作人耕作相営候条可得其意候

附り、兼而農業罷在事弟(ママ)又ハ子供相果、或ハ荒使子拂底共ニ而一梁(両)年限等相立、預ヶ置候而料取納致候者たり共、料米之義ハ」本文同断、尤人ニ寄、請戻候半而ハ不叶義も可有之、右等ハ追々委曲可相達、先以當麦作迄ハ打追作方相整候様

(197) 一加地子米之義、一切取納不致様、今般地主共へ申達候ニ付、矢張作り掛之者耕作致候様、尤俄ニ甘候処聊奢ヶ間敷有之候而ハ決而不相叶候条、矢張是迄」之心得ニ而料米遣候丈ハ別段ニ致、銘々急度囲置候様事

(198) 附り、是迄領地之内、兼而農業之者罷在弟又ハ子供相果、其外無余儀筋ニ而年限等相立、預り置候

而之料米も遣候ニ者不相及候得共、右田畑之儀、事ニ寄候而ハ為請戻候半而不叶儀も可有之、
右等追々委曲申達、先以當麦作仕付」之儀ハ打追之作人ゟ相整候様

皿山代官
小代清兵衛

右御達之趣奉畏候、以上

点役庄屋　三　太　夫

」

(200)

第一四四項
辰年御囲米
備の事

注、この項、
全文抹消の
印あり

(201)

但シ辰秋迄ハ組内御囲米御備ニ成
一米壱石弐斗五升
右ハ巳秋御囲米御目安ニ相成申候へ共、十一月組方ゟ備ニ不相成候由ニ付、村方ニ備ニ相成居候、
向々ハ御目安ニ立方ニ相成候哉、委細者満武清治殿別紙帳ニ見ル、右も同人預り被成候
右者備ニ相成候事　　満武清治

庄屋　佐　七
村役　弥右衛門

」

第一四五項
午年御囲米
備の事

注、この項、
全文抹消の
印あり

(202)

一米壱石弐斗五升
右者午秋御囲米御目安向ニ相定居候組方ニ者不相納候ニ付、村方備ニ相成候、同人預り相成候
右御囲米間違ニ相成申候事
清治ケス　　満武清治

庄屋　佐　七
村役　弥右衛門
横目　寅次郎　」

(203)
第一四六項
午年正月用
御肴酒料の
事

午秋
但シ銀百匁代
一　銭拾貫四百文
利
内
壱貫九百三十二文　未正月六日十一日両度御肴酒小遣迄入用　」

(204)
第一四七項
未年正月用
御肴酒料の
事

未秋百匁
一　銭拾貫四百文
利
内
本弐貫四百文　申正月両度分御酒肴用
同百弐拾文　御上様御病気ニ付願書熨斗用　」

(205)
第一四〇項

一弘化四年未秋、三太夫殿自身宅浦溝江水車存立ニ相成、村方ニ及相談候所、少々障之屋敷ニハ、(裏)

小川三太夫水車設置に付、田補村方と約定の事

自身持下地ゟ左ニ書載之通弐畝拾六歩半夫々被相補、壱畝廿歩自身名寄前〆田数四畝六歩半ニ相成申候、但シ千年ニ相成、堤水等落方ニ相成候節者、車被差留候事、惣而ハ田方水廻」不勝手ニも相成候ニ付、田方為補金弐両毎年差出候通約定相済、受人相立候而相済申候、已上

未十二月　　本人　三太夫
受人　亀五郎
仙蔵

村方御衆中

(206)

一補田数付覚　三太夫

中四歩半　乙松　上四歩　藤八
米壱升三合七勺　同壱升四合三勺

(207)

中四歩　嘉十　上拾弐歩　權兵衛
同壱升弐合七勺　同四升八合
中三歩半　利三郎　上五歩半　清吉
同壱升六合　同三升弐合三勺
上九歩半　為蔵　上六歩半　徳太郎
同三升弐合三勺　同弐升弐合壱勺
上五歩半　幸之允　上五歩半　清十
同壱升八合八勺　同壱升八合八勺

(208)

横田ノ内

中壱畝廿歩　内拾弐歩　敬三郎
同壱斗五升壱合七勺　壱畝八歩　三太夫
上拾弐歩　三太夫　田数　四畝六歩半
同四升八勺　米　四斗八合五勺
済」

(209)

第一四九項
洪水被害田に村方加勢の事

嘉永元年申夏大洪水ニ付、道手川土井相崩、同所田方九番闍ノ内下六畝拾四歩、下々弐畝拾七歩〆田五畝壱歩、地米六斗四升九合相懸り候場所、酉ゟ向五ケ年之間、否ニ相成候ニ付、鹿蔵ゟ取除向八ケ年酉ゟ及相談候ニ付、其通村方相談納得いたし相済居処、翌戌ノ春又々両度之洪水」ニ而同所川土井相崩、田方五畝余り又々否ニ相成候故、右八ケ年取除外ニ四ケ年相増相談ニ付、開為夫丸亥春三拾人村方ゟ加勢、惣而為夫料米弐斗ツヽ亥年ゟ拾ケ年是又村方ゟ差出候通、扨又年限相満候上ハ、元之通返進相成候通之約定ニ而相済申候事」

(210)

嘉永三年
戌年　鹿蔵
為五郎

(211)

庄屋佐七殿
横目寅右衛門殿
村役弥右衛門殿
其外御衆中」

(212) 第一五〇項 不作のため飯米借用願いの事

乍恐奉願上口上覚

御知行所川古村去秋無類之損毛、殊ニ當春麦作之儀同様損毛ニ而、百姓中ニも作飯米等無之通相成極々難渋此時ニ御座候、惣〆ハ近来御用繁之御事弥ヶ上難奉願御座候得共、正米三拾五俵丈御拝借被仰付被下度、於然者御蔭ニ出来秋迄取續尚又難有存上候条、幾重ニも御仁恵」を以其通被仰付度、尤返上之義ハ被仰付次第ニ無遅々相納義ニ御座候条、何卒願之通被仰付被下候様御筋々宜敷被仰達可被下儀深重奉願上候　以上

慶應三年

卯七月　　庄屋　覚兵衛　　」

(213)

(214) 第一五一項 反米免除願いの覚

乍恐奉願上口上覚

地米四石三斗壱升六合

此反米壱斗壱升

右反米被相除被下候様御点合被差出可被下候、但先年川古郷川古西分村岡部七之助殿御給地之内、砂下洗剥相成、年限無米被仰付置候ニ付、去子壱ヶ年分申迄儀ニ御座候、已上

元治三年

丑三月　　庄屋　覚兵衛

御代官

御役所　　」

(215)

(216)

(217)

是ゟ向ハ代官所手数相成候事
右反米相除候様御点合可被差出候、断本文御座候　已上
丑三月　池田文八郎
坂部又右衛門殿
深江助右衛門殿

是ゟ向ハ検見方ニ而手数相成候事
右地米四石三斗壱升六合相違無御座候、已上
元治二年
丑三月　村岡官蔵
大木傳之進
右乞筈前之儀致存候、已上
郡目附

(218)

第一五二項
川古宿旅人
宿月払控覚

月拂控覚　川古宿旅人屋
但上書相印候事
慶應四年辰三月旅人月拂帳　宿屋
平太
慶應四年辰二月中旅人
滞在之儀ハ、壱人茂無
御座候、若隠置後日於

(219)

顕然者私越度可被仰付候、
已上

宿屋
平　太
覚兵衛
組合　末　吉
善太郎
喜太郎
庄屋繁右衛門
御代官
御役所

川古宿旅人屋
宿屋
近次郎
但上書ニ相印候事
慶應四年三月旅人月拂帳
慶應四年辰二月中旅人
滞在之儀ハ、壱人茂無
御座候、若隠置後日於
顕然者私越度可被仰付
候、已上

宿屋
近次郎
六次郎
仁兵衛
為　蔵
兵大夫
庄屋繁右衛門
組合

御代官
御役所

」

覚

（222）第一五三項

御公儀御法度扨又御私之御法度下々迄奉得其意罷在候、私懸り内博奕之儀者不及申懸ケ之諸勝負其外人集不仕、不審成者壱人茂無御座候事

（223）公儀法度並びに藩法遵守の月例報告

一於私懸り内不審成紛者之類無之哉」否哉相改申候処、壱人茂無御座候、且又旅人相抱之儀者不及申、他方ゟ走来候者壱人茂無御座候事

一於私懸り内不依何事ニ御公儀御法度相背候者御座候半、縦親子兄弟たり共、早速可申上候事

一於私懸内不依何事出入無御座候、尤懸内ゟ申上儀」無御座候事

（224）右之趣辰二月中私懸り内懇ニ申渡、聊相違之儀無御座候、萬一相違之儀茂御座候半ハ、私越度可被仰付候為其月筈如件、已上

慶應四年　　川古西分

(225)

辰三月五日　　点役庄屋繁右衛門　」

御代官

御役所

(226)

第一五四項
京都行夫丸
差出覚

京都行夫丸差出覚

此節上様御城(上)京ニ付川古村西分江夫丸壱人御割付ニ相成候ニ付、村中寄方仕吟味之上、弘蔵殿請合ニ相成、為手付金直ニ壱両渡方ニ」相成候、将又賃銀之儀者出仕ニ相成候其日ゟ三十日之間ハ、日々壱部ツヽ、其後ハ三朱ツヽニ相定候ニ付、後日為無違乱急度相加申置儀ニ御座候、已上

慶應四年

辰二月廿五日

寄方之前定如件　」

(227)

第一五五項
欠落甚吉探
促願いの事

慶應四年辰三月十九日

甚吉

右之者宿許立出、行衛相知不申段、一類・与合共ゟ達出候趣筋々御聞届、出奔手数被仰付旨候条、御領中探促之儀、与合之内ゟ人柄相撰願出候様、左候而一類付御用有之候条、生子二つ迄年付名書養実之分等願出、同様来廿九日迄之内、役筋差出候様其筋相達」可申候也

（228）

御代官所

乍恐奉願上口上覚

川古郷川古村

欠落

甚吉与合

袈裟太郎

」

（229）

右甚吉致欠落仕候ニ付、御領中探促之儀、与合之者共江被仰付儀ニ付、与合之内ち人柄相撰願出候様被仰達奉畏候、就而者右書載之人茂慥成人ニ而御座候ニ付、御支所無御座候半ハ、右御領中探促之儀被仰付被下候様奉願上候条、御筋々宜敷被仰上可被下儀深重願上候、以上

（230）

欠落甚吉

与合袈さ太郎

其　外

庄屋関太郎殿

右之段奉願上候条願之通被相済被下度、断本文ニ御座候、以上

庄屋関太郎

」

（231）

御代官

御役所

」

(232)

第一五六項
物価高に付、高値の品々届出の事

諸津漁業之小肴類、諸山郷村より賣出候竹木薪野菜菓物縄藁等之儀、打追高價有之自余之價をも致関係候趣相聞候ニ付、於懸々手締相成候様被相達候条、三割落前後賣出候品々直段(値)付早急取調子役筋差出可申候也

辰　四月十一日出ル也（後記入）

四月廿五日届キ

庄屋

関太郎代

御代官

御役所

(233)

第一五七項
神仏分離令達の事

御代官所達写

一禁裏御用或者禁裏御料又者禁裏御用杯と会符牌示杭標札等書記候儀者有之間敷事ニ候処、往々見受候ニ付、已来吃度御料と而已書記いたし候様被」仰出候事

但標札者姓名相記、又者官名役名等記候儀者不苦候事

(234)

燈灯又ハ陶器其外賣物等ニ御紋を書候事共如何之儀ニ候哉、以来右之類御紋を私ニ付候事吃度可禁止旨被仰出候事

但御用ニ付是迄被免之分茂一應伺出可申事

(235)

中古以来某權現或ハ牛頭天主之類其外佛語を以神号ニ相称候神社不少候、何レも其神社之由緒委細ニ書記早々可申出事

(236)

但勅祭之神社御宸翰勅額等有之向者是又可伺出候、其上ニ而御沙汰可有之候、其餘之社者裁判鎮台領主支配頭等江可申出事

一佛像を以神体与致候神社者以来相改可申事

附本地等と相唱、仏像を社前ニ懸、或ハ鰐口梵鐘佛具等之類差置候分者早々取除可申事

右之通被相達候条筋々無洩相達可申候也

慶應四年辰四月　代官所

右之趣奉畏候

庄屋関太郎

(237)

写

本部宿　儀平

川古宿　佐七

其外

(238)

第一五八項
蝋屋職小物成の事

右之者、蝋屋職相営晒蝋之儀干莚数願高御免札相渡被置候ニ付、自然御定之外、干莚相整候ハヽ御取揚をも被仰付候御法前ニ而、右拵方之儀者専晴天之致事候処、壱ヶ年之内、凡百五拾日位なら者干方不行届由、然処旅方ゟ火急之注文有之砌者、兼而御法之旨も有之儀ニ付、余慶(計)之干方不相叶、無餘儀同職透間之向ゟ及相談候処、運方其外隙取汐合迦与相成、去迚年々注文多少有之定

(239)

式之見渡出来兼候ニ付、莚数ニ不相抱御運上被相定、干方相整候通被仰付下度、蝋受元姉川唯七
其外5願出」之趣、御頭人与兵衛殿御聞届、一体是迄之御定も有之儀ニ候得共、壱ヶ年之内、凡
半高同数程干方不行届通ニ而者訴面之次第無餘儀相聞候条、莚数ニ不相拘、干莚床ニ付判銀六拾
目宛毎歳相納候通被仰付儀ニ候、惣而是迄相渡被置候御免札之儀者、書替被相渡儀ニ付早速
御小物成所被納候様旁被相達候条、筋々懇ニ相達可申候也

慶應四年　代官所
辰四月

右之趣奉畏候以上

庄屋関太郎

（241）（240）

（空　白）」

（242）

殿様御上京ニ付而夫丸壱人御割付ニ相成居無候処、上筋相勤はけ敷由ニ而其上壱人増夫ニ相成候条、
村中吟味之上、甚助殿請合被致、為手付金壱両相渡シ幸蔵殿与右両人約定仕日雇銀之儀者前々委
細相印置依而一札如件」

慶應四年
辰閏四月　庄屋覚兵衛代

（243）第一五九項殿様御上京に付、夫丸差出覚

（244）

覚

小配分」

（245）第一六〇項代官所並び郡方に納銀の事

(246)

川古村

一米壱石五斗六升八合
　右者代官所
同弐斗壱升弐合
　右者郡方
　但東西ゟ納前也、尤二ツ割ニ〆御銀弐百四拾九匁弐分
〆米壱石七斗八升
　代銀四百九拾八匁四分」
右米使前傳十殿可相渡候、但卯秋使前　米割出前追而引合可申候、
以上

竹千林平
卯十二月廿八日　江頭卯右衛門
川古村小配分
庄屋中

(247) 第一六一項
他郷普免請
寄夫料米除
願い書

(248)

乍恐奉願口上覚

我々懸川古郷川古村之儀、普請其外無絶度有之候処ゟ郡中割を以、普請被仰付、夫々相整候処他郷出夫之儀、何分ニも持合兼候処ゟ夫料米として米拾八石五斗六升八合宛年々相納、然処去ル寅年東目水害ニ付、大総之出夫御割出シ相成候ニ付、是迄夫料米として書載之石数年々相納来候ニ

付而者、他郷出夫等之義者不仕儀与相心得罷在候処、右料米之儀者郡継料米之名目ニ而役米帳之外御取納相成筋ニ付、他郷出夫之儀者是非共差出候半而不相叶段被仰達奉畏候、右ニ付数百人之夫丸賃銀を茂」相納申上候、就而者地行小村之上、難百姓勝ニ而年々之普請筋をも余慶(計)之出夫高、ニ相及候処、前断役米帳之外郡継料米として御取納相成候ニ付而者、全二重之御点役ニ相成、村方の難渋甚苦々敷次第御座候処ら百姓中らも右料米之儀者被相除被下候様」相願候付而者無餘儀奉願条、當時之御半難奉願恐入奉存上候得共、左ニ書載之石数郡継料米之儀御除被下度、何卒御仁恵之御吟味を以事之通被仰付被下候様、此段御筋江宜被遂御吟味被下共深重奉願上候　」

米拾八石五斗六升八合
以上

川古西分村　庄屋佐助
東分村　庄屋清之進

御代官
御役所

(249)

(250)

(251)

第一六二項
郡継料米免除願いの事

(252)

右之通願候処、一先被相済申候、以上　」

辰秋川古郷郡継料米拾八石五斗六升八合御取納可相成筈ニ而書送相成候処、右者役米帳立無之ニ付被相除度村方願出之趣、掛り代官百武作右衛門ら達出相成候得共、未何連共御吟味ニ付不申、然処當三月御蔵究引合反(端)的差支候ニ付、右料米引合之儀一先相除」候様被仰付儀候条、此段筋々可被相達候、以上

(253)

巳三月廿九日

右之通御達相成候、以上　」

（254）第一六三項　甚助軍夫となり出征の事

六月二十九日ゟ甚助と申者、上方筋相勤ニ付、為軍夫武雄上綱殿出勢之時、佐嘉ゟ粉（ママ）ニ田方御出ニ相成、右之夫ニ被召連、同年十一日廿八日ニ罷帰り、日数百四十一日程相勤申候、以上　」

慶應三年

卯年　庄屋覚兵衛代

右者東方ゟ者両人参リ候也

（255）

（256）

（慶応三年）同年八月五日ゟ幸蔵申者分過夫ニ登り、十二月廿五日帰田仕、日数百四十一日ニ相成申候」尤東分ゟ茂壱人也（と脱カ）

庄屋覚兵衛

村役為　蔵

横目重　助

筆者慶右衛門

（257）第一六四項　七之助様軍功により加増祝いの事

（258）

岡部七之助様辰ノ正月四日ゟ御出勢被遊、巳正月四日ニ御帰陣ニ相成、御手柄ニ付、殿様ゟ正米拾石末代御加内蔵相成候ニ付、小姓被官幷庄屋」役中幷頭百姓数拾人御酒御拝領ニ相成、終日御祝有之候事、已上

明治二年　庄屋覚兵衛

（259）

巳四月吉日　村役　重　助

横目　為　蔵

御代官

満武久左衛

御境目方

井手佐兵衛

」

（260）

第一六五項

岡部給地物成目安郡令所へ報告の事

一明治弐年巳秋、御物成米是迄者岡部七之助殿御取納ニ相成来候得共、大政御一新ニ付而御内蔵入ニ相成、新ニ武雄江御郡令所相立候条、御物成目安差出候帳左之通

」

（261）

元岡部給地西分村

一地米弐百拾八石七斗三升壱合

内

除米弐拾弐石七斗壱升三合

残御物成米百九拾六石壱升八合

口米拾弐石三斗七升四合八抄

夫料八石七斗五升九合弐抄

但夫反口入テ

御小物成米七石七升九合四抄

〆米弐百弐拾四石弐斗三升壱合四抄

同五石五斗七升七合六抄　反米

（262）

」

（263）

同五斗六合三勺　竹木料
同弐斗六升弐合五拇　小庄屋料
同六斗五升六合弐拇　大庄屋料
同九石五斗八升九合九拇　抱夫料
本口合米弐百四拾石八斗弐升三合九拇

（264）

内
米五石　庄屋給
同壱石弐斗　村役給
同拾石六斗壱升弐合
右者洗剥落
同三斗壱升八合四拇
右者反米
同七升四合九勺
右者古否反米
〆米拾七石弐斗五升三拇

（265）

残御物成米弐百廿三石六斗壱升八合六勺
右之通御座候、以上
明治弐年
巳十一月

武雄
御郡令
御役所

第一六六項

川古村東西合併反対の陳情書の事

(266) 御一新ニ付、東分江寄セ庄屋之達ニ付百姓中歎願左之通

乍恐奉願口上覚

(267) 我々儀杵嶋郡川古郷川古西分罷在候処、今般」大政御一新、府藩県之制を以、御政体被相定旨被仰出候趣ニ而、川古西分元岡部七之助給地、武雄御郡令所懸り与相成、川古東分江寄セ庄屋ゟ被仰付候段蒙御達奉畏、西分知行零落村之上、近年未曽有之大凶作打續、一村之難渋凌饉飢候得共、百姓漸々相衰へ耕作方取」繋行届不申候処ゟ田居付方村かり入或ハ年賦返済當夏ニ相成候而者及飢候ものへハ一季借り入を以、見継相整置候筋彼是表向キ難明シ儀共多々有之候故、元給地丈ニ(倒)〆西分へ庄屋被召立被下候道者相叶間敷候哉、只管奉難愁候、其通ニ而者御年貢米御取納方御面働ニ被為有」御座候儀も乍恐考服仕候得共、前文之事情御賢察被召加へ願之通被仰啓可被下儀伏而奉願上候、

(268) 於然者内輪順露之申談一致仕、旧借凌之弁利彼是他所へ恥辱を顕シ不申、御重恩之次第千萬難有奉存上、何卒御格外之被為御吟味附被下度、御筋々宜敷」被仰達可被下候、恐々謹言

(269) 明治弐年
巳十月

(270) 」

第一六七項
川古村東西
役米覚

東西分反米夫料其外手覚

但荒地米ニ壱分半引残有米ニ三懸ル
一米拾石九斗五升七合
残り役米ニ三ケ弐ニ七升五合懸ル

抱夫料
一同拾八石五斗六升八合

西分出来地抱夫料
一同三斗九合

郡継料
一同拾八石五斗六升八合　除ク

除役米ニ壱斗五升懸壱分引

小庄屋給部引
一同五斗壱升五合六勺

除役米ニ壱斗五升懸ル
大庄屋料
一同壱石弐斗八升九合壱勺

竹木買料
一同九斗弐升弐合

（275）　（274）　（273）

第一六八項
正月十二日
盗難口達の
事

口達

一三徳　但銀金具ニ羅紗　弐ツ
一嶋袷　但男物　壱ツ
一嶋羽織　右同　壱ツ
一嶋半天　右同　壱ツ
一紺帯　右同　壱ツ
一脇さし　但忠広鍔ニかくれ笠付　壱本

」

一金拾壱両計り　但白銀弐朱金札古弐朱入テ

〆

右之通、當月十二日夜、川古郷川古宿覚兵衛盗逢候段相達候ニ付、此段御達申上候、以上

明治三年

午正月十四日　庄屋清之進　判

」

御郡令

御役所

」

井手家文書

川古庄屋日記附録（一）

井手家文書目次

第一号　奉願口上覚　嘉永六年二月　（秀岩寺雷応和尚江湖会勤行の願書）
第二号　乍恐奉願口上覚　嘉永五年七月　（火伏七体地蔵尊敷地免租願書）
第三号　乍恐奉願口上覚　嘉永五年八月　（洪水凶作につき御加勢米拝領の願書）
第四号　（借銀に対する村方定断簡）
第五号　下村本田内割帳写　天保七年存
第六号　御知行所川古村酉亀有米引合帳　嘉永三年六月

第一号　奉願口上覚

拙僧儀、於當寺御国家安全且佛祖為報恩、當四月朔日ゟ来ル七月十五日迄、江湖相勤度奉願候、勿論疎之儀等無之通、急度心遣可仕義御座候条、郷内御支所無御座候半者何卒願之通御許容被仰付被下度、御筋々宣御相達可被下儀深重致御願候、以上

杵嶋郡川古村秀岩寺
雷　応　㊞

嘉永六年
丑二月

庄屋三太夫殿
庄屋　佐七殿

右之通奉願候条、願之通被差免被下度、断本文ニ御座候、以上

丑二月

庄屋　佐　七　㊞
庄屋　三太夫　㊞

御代官
御役所

第二号

乍恐奉願口上覚

両御知行所川古村之義、先年ゟ度々出火出来仕候而、両村ともに至極難渋ニ罷成候処ゟ両村申談事、火伏七体地蔵尊建立仕候得ども、敷地無御座候、然ル処下宿罷在候元吉与申者隠只今明屋敷ニ相成候場所、元神様敷地ニ而御座候由、依之近来恐多奉存上候得共、右屋敷之内ゟ畝数拾八歩地蔵敷地江（ママ）御免地江被仰付被下候道者御座有間（敷）哉奉願上候、被差免於被下者御蔭ニ両村之者共（安）案心仕、御重恩之程尚又有（難）仕合奉存上候条、御支所無御座候半者御筋々宜被仰達可被下義深重奉願上候、以上

嘉永五年
子七月

川古村百姓中
村役　鹿　造
横目　九兵衛

願之通申付候

満武勇之進殿　　庄屋　佐　七

前文之通、火伏地蔵敷地何程歟御免地ニ被仰付被下候様奉願候ニ付、御支所無御座候ハヽ御筋々宣御相達被下度深重頼入義ニ御座候、已上

子八月　　満武勇之進

野口利助殿

第三号

乍恐奉願口上覚

御知行所川古村百姓之義、御蔭ニ百姓相営相續罷在候処、近年打續洪水其外凶作ニ而至極難渋ニ罷成候処ゟ當春田起料奉願上候半而不相叶候、東懸りニ候処江御普請方御取懸りニ相成候而延引仕候処、御普請方ニ〆も前段不計場所ニ而諸郷ゟ出夫も多有之、夫ニ応シ村方夫扨又竹木等例年ゟ入越候得共、一先相整罷在候処、去ル三月之大洪水ニ而、右之場所所々又々七合通白地ニ相成候ゟ、兼達之御願書差上候筈之処、御隠居様御病気相重乍其上御死去被為遊御座候ニ付、奉恐入候是迄相控罷在候得共、至極行届兼候ニ付、田起御救米扨亦普請竹木料、右両様ニ正米御拝領被仰付被下候道者御座有間敷哉奉願上候、誠ニ近来是等之義奉願上候直り奉恐入候得共、前文之次第不得止事奉願上候条、御支所無御座候半者御筋々宣被仰達可被下義偏ニ奉願上候、已上

嘉永五年

子八月　　川古村

百姓中
村役　鹿　蔵　㊞
横目　九兵衛　㊞
庄屋　佐　七　㊞

満武勇之進殿

右之通、願入ニ相成候間、支所無御座候ハヽ御筋々宣敷御相達可被下儀深重頼入義ニ御座候、以上

子八月

満武勇之進　㊞

野口理助殿

第四号

（借銀に対する村方定断簡）

一去亥秋御屋敷ゟ忠八郎様御出御達ニ相成候儀者、江頭調兵衛ニ御借銀被遊御座候趣ニ付、献米一式右人江相渡間銀を以拂入ニ相成候申談事ニ付而、當子御蔵究相整候約定手形等差替シ候得共、従御屋敷何レ之御申談事ニ相成候哉、弥今行廻正金四拾両丈納方不行届ニ付、山村太郎左衛門様・江口弥太夫殿御出有之、御達之儀者前上納之構ニ〆右金何レ之筋ゟ歟も借入を以差出呉候、左無之就而者御上下之難渋ニ相懸其直り村中も聞咎候様被仰達百姓中も数年弥ヶ上之難渋相懸候未ニ付而ハ、何分ニも銀調之借向不行届候得共、其上之恐を以此節迄ハ何之道よりも出来立候半者而不相叶処ゟ、百姓中天萬宮江七月四日早々ゟ翌五日之夜迄相詰、右金借立之吟味ニ相決申、惣〆者當子秋献米者勿論御物成之儀も前上納御引合無之内者御屋敷ゟ何分之御達ニ相成候而も一向差上不申候通吟味相極り、何茂承知之前ニ而判付了相成

候

附り、右吟味ニ付而者、万一□之次第相背候者有之候節者、百姓中打寄〻方有之候半者而不相叶、且亦百姓内ゟ一人たり共右之吟味御屋敷江相聞江候而とがメを蒙候節者百姓打寄救合相決候事

一何歟ニ不寄御屋敷夫丸ニ参候而、村中之善悪言立候者有之候得者、自然与村内吟味相崩候間、させらざる申候者是又相調返答次第とがめ勿論之事

一當秋ゟ之庄屋並役々御屋敷ゟ申達ニ相成相勤候人々、若シ御屋敷ゟ難渋ケ間(敷)御達有之、村中もふために相成候仰出有之其通返答仕候得者（以下後欠）

(表)
判太夫　政七　文助　儀右衛門
要助　吉左衛門　卯平　以上
要右衛門　喜太郎　長七
菊十　儀左衛門　弥三郎
善作　幸之允　大助
勇之進　卯右衛門
政十　(裏)和太郎　喜八
専蔵　嘉蔵　惣左衛門
幸八　惣七　久右衛門
儀助　増蔵　喜兵衛
伊三郎　八百右衛門　六郎兵衛

第五号

下村本田内割帳写

十角　塚田
一田地　六反三畝拾五歩

十二角　ひなた川　出来三畝入テ
一同　五反六畝二歩

十三角　ひなた川
一同　四反弐畝弐六歩

壱角　下井手　出来壱畝入テ
一同　三反二十六歩

弐角　筆藤　出来二十八歩入テ
一同　壱反七畝弐七歩

三角　柿副
一同　壱反拾七歩

四角　道手　出来壱畝廿弐歩入テ
一同　五反拾八歩

五角　水持
一同　壱畝十八歩

六角　道手
一同　四畝弐九歩

七角　道手　出来三歩入テ
一同　弐反壱畝廿七歩

八角　道手　出来六歩入テ
一同　弐反七畝壱歩

九角　道手
一同　八畝九歩

十角　広早（品）田
一同　六畝弐歩

十壱角　石橋
一同地　弐反五畝八歩

十二角　広早田
一同　弐反七畝廿三歩

十三角　大石ケ谷道上
一同　壱反壱畝廿五歩

壱角　不う切れ田
一同　三畝九歩

弐角　同所
一同　壱反四畝八歩

○落入レ

三角　不うれき田
一同　五畝六歩

四角　田
一同　四反五畝廿四歩　出来壱畝入テ

五角　清水又
一同　六畝拾弐歩

六角　清水又
一同　八畝廿弐歩

七角　大ふけ
一同　壱町弐反九畝廿五歩

八角　宕ノ口
一同　九反拾八歩　出来壱畝入テ

九角　通葉山
一同　六畝三歩

十角　ゆはの元
一同　五畝弐歩　落入

十一角　永葉山
一同　五畝廿九歩　落入

○落入

十二角　永葉山
一同　五畝三歩

十三角　同所
一同　四畝拾歩

〆田数　七町三反七畝十七歩

十四角　孫六
一同　弐畝廿六歩　出来廿八歩入テ

十五角　孫六
一同　弐反五畝拾六歩

十六角　孫六
一同　九畝廿四歩

後十八角　平原
一同　五反拾弐歩

前十七角　作道
一同　三畝七歩

十九角　焼山
一同　弐畝拾歩

二十角　弓松
一同　壱反九畝拾九歩

二十壱角　山ノ尾
一同　七畝

二十二角　石ノ谷
一同　弐畝弐歩

二十三角　椎ケ川
一同　九畝九歩

二十四角　同所　出来壱畝拾歩入テ
一同　五畝拾七歩

二十五角　同所
一同　壱畝弐歩

二十六角　ひゑ田
一同　壱反壱畝弐歩

二十七角　同所
一同　壱畝拾壱歩

二十八角　堂ノ尾
一田地　廿九歩

二十九角　鳥越
一同　三畝廿壱歩

壱角　小ふけ
一同　廿六歩

二角　奥ノ古場神山
一同　壱反弐畝拾五歩

三角　餅田
一同　七畝弐歩

四角　こていころし
一同　壱畝

五角　同所瓦畑
一同　拾五歩

六角　弥惣田
一同　五畝弐歩

七角　かるかや原
一同　壱反八畝廿八歩

八角　かるかや原
一同　弐畝拾五歩

九角　同所
一同　壱反三畝拾九歩

十角　小次郎かくら
一同　弐畝拾八歩

十一角　くり原ばら
一同　壱反壱畝五歩

十二角　宕ノ下
一同　壱畝廿九歩

〆田数　弐町三反六畝三歩

十三角　栗はい原
一同　六畝弐歩

十五角　屋敷田元出来入テ五反五畝十二歩ノ内ち
一同　弐反壱畝六歩

壱角　はい川
一同　四畝九歩

二角　同所
一同　弐畝拾七歩

三角　堂ノ前
一同　弐反七畝拾歩

四角　堂ノ前
一同　弐反壱畝五歩

五角　法切田
一同　壱反弐畝七歩

六角　林副
一同　壱畝十歩

七角　同所
一同　弐反拾三歩

八角　庵ノ下
一同　八畝五歩

九角　酒屋
一同　弐拾壱歩

十角　餅田
一同　三反弐畝十五歩

十一角　荒川原前田
一同　七畝拾六歩

十二角　同所
一同　壱反五畝廿五歩

十三角　同所
一同　壱反三畝廿壱歩

十四角　古賀ノ葉山　出来五歩入テ
一同　壱反七畝六歩

十五角　同所
一同　三畝廿八歩

壱角　岩ノ下
一同　弐畝拾弐歩

弐角　牟田
一同　壱反三歩

三角　野副
一同　壱反四畝九歩

四角　寺田　出来三畝八歩入テ
一同　五反八畝廿七歩

五角　土井外
一同　三反四畝壱歩

六角　荒川原　出来弐畝十七歩入テ
一同　六反六畝十壱歩

七角　十ノ間　出来三畝廿壱歩入テ
一同　七反壱畝廿六歩

壱角　井手脇　出来六反廿三歩入テ
一同　壱町三畝十七歩

二角　屋婦ノ元
一同　弐畝九歩

三角　同所
一同　五畝七歩

四角　大日
一同　八畝三歩

五角　松葉
一同　弐畝

六角　屋婦ノ元
一同　弐畝廿四歩

〆田数　五町九反九畝五歩

以上

惣〆高田地　拾五町七反弐畝廿五歩

御知行所川古村酉亀有米引合帳

但小物成入テ

一　米弐百弐拾石弐斗六升弐合五抄

内

米七拾六石七斗三升四合八抄

右者献米

同拾石

右者兵吾様引分

同壱石弐斗五升

右者御囲米

同三石

右者於梅様引分

同九斗

右者市左衛門拂方

同四石五斗

右者百姓江救米売米

同三斗

右者勇之進母渡シ

同三斗

右者田開方ニ付鹿蔵渡

同六斗

右者代官給清治渡

同三斗

右者調練方ニ而御拝領

同六石

右者酒屋弘蔵殿借付

〆米百三石八斗八升四合八抄

残米百拾六石三斗七升七合七抄

内

米三石

代銀三百弐拾五匁

右者三斗ニ付、三拾弐匁五分ニ〆

難儀之者へ賣渡シ

同百弐石

代銀拾弐貫七拾匁

三斗ニ付、銀三拾五匁五分かへニ〆

戌二月迄賣米高
同拾三石三斗七升七合七抄
三斗ニ付、三拾弐匁五分かへ
代銀壱貫弐百五拾五匁三分四厘
但右三廉米百拾六石三斗七升七合七抄
〆銀拾三貫六百五拾匁三分四厘
内
酉九月六日御月割
正金弐両三部
九日　御仕込方
同壱歩
二十九日　炭薪油代
同三歩
同弐両　御月割
〆金五両三歩
代銀三百七拾三匁七分五厘
利足拾六匁八分弐厘
十月廿八日御月割

同弐両
炭薪油代
同三歩
但正銭五百匁入テ茶弐斤代之由
〆金弐両三歩
代銀百八拾三匁五分五厘
利息五匁五分壱厘
十一月廿七日　御洗多(灌)具用
同三両
御隠居様用右同断
同弐両
御月割
同弐両
炭薪油代
同三歩
〆金七両三分
代銀五百三匁七分五厘

十二月廿九日　御月割
同弐両　炭薪油代
同三歩　髪油代
正銭百七拾五匁
金三両　年越用
同三両　薬料
同壱両　道快様包
同弐両　下女恩扶
〆金拾壱両三歩
代銀七百六拾五匁四分五厘

正月御月割
同弐両　炭薪油代
同三歩
〆金弐両三歩
代銀百七拾八匁七分五厘

二月十日御洗た具用（灌）
同弐両　御籠用
同壱歩　廿八日御月割
同弐両　炭薪油代
同三歩
〆金五両
代銀三百弐拾五匁

三月廿三日御月割
同壱両　炭薪油代
同三歩
四月分三月江仕送方之由
同壱両

〆金弐両三歩
代銀百七拾八匁七分五厘

四月廿九日　月割
同弐両　炭薪油代
同三歩
同壱両　女中恩扶
〆金三両三歩
代　弐百四拾三匁七分五厘

五月九日
同壱歩　御差向用
正銭百六拾文右同断
二十九日　御月割
金弐両
六月九日炭薪油代
同三歩
〆金三両

代　百九拾六匁五分三厘
酉九月ゟ戌六月十日迄
惣〆銀弐貫九百七拾壱匁六分壱厘

十一月廿七日
金四両　作事用
同弐歩　なでうす
但証文前
銀七百三拾四匁七分五厘

同百五拾弐匁　たゝみ替

金壱両　おちか様・庸太郎様用

銀百九拾五匁　呉服屋拂

同壱貫七百六拾八匁八分五厘
但金五両ニ歩入テ

〆銀三貫弐百七匁五分

十二月十九日

同壱歩　風呂桶

同壱歩　利足勘定違

同拾四両　上返上

同壱歩　兵吾様

二十日

同三両　御作事用

同壱両壱歩弐朱

右者兵吾様稽古道具

十一月十四日

同壱両　祭礼用

銀六拾弐匁五分　与内懸り銀

同六匁　調練方雨覆代

同四拾八匁七分五厘

右者福地様講

但金弐拾両弐朱入テ

〆銀壱貫四百弐拾五匁三分七厘

二月十日

同三両　御　様用

同壱両　助之丞様用

弐枚まへ

同拾四両　上返上銀

但金拾八両入テ

〆銀壱貫八百七拾匁

銀四拾三匁五分

右者百姓中御酒拝領

同百目

右者被官中右同断

同五匁　塩田八天社上り

同拾六匁五分　講入方

同三拾弐匁七分　普請竹木

同三貫五百三拾壱匁九分壱厘

右者酉引合庄屋惣銀
同弐拾六匁三分八厘
右者十月十一月利銀
同百三拾匁
右者利助殿恩扶
同百三拾匁
右者利三郎殿右同断
〆
三月二日
弐朱壱
右者伝右衛門殿大義料
三月二十一日
正銭六百文　飛脚大義料
二十三日
金壱両壱歩　作事用
同壱両　石井様茶講
同弐歩弐朱　山帰来

同弐歩弐朱　む子(棟)瓦代
同弐歩弐朱　家普請賃
同壱両三部　材木代
〆金六両四貫四百拾壱匁五分六厘代
四月二十四日　助之丞様御越
同弐歩　節御帰小遣
四月二十九日
同弐歩　松崎様行茶講用
同壱歩　御小遣用入越
同三歩弐朱　作事用
〆金弐両弐朱

代銀百三拾八匁壱分弐厘五

五月九日　　御法事用
同壱両三分
　廿四日
同弐歩　　兵吾様渡り
六　　節句用
同壱歩　　深堀様行

正銭百六拾匁　利三恩扶
同壱両　　七三右同断
正銭三百文　　拘柄代嘉兵渡る

銀六拾六匁弐分　三太夫殿渡シ
同弐拾四匁三分七厘五　鼠切
同百九拾五匁　百姓救米
〆銀五百五拾六匁五分八厘
惣〆銀拾三貫八百八拾七匁四部五厘

差引
惣銀弐百三拾七匁壱分壱厘
右之通御座候　以上

戌
六月廿四日　　庄屋佐七
六月廿五日
金弐歩　　利助渡

同壱歩　　利三郎渡

同壱歩　　釜代

正銭六百文　　飛脚賃
金壱歩　　御法事用秀岩寺
正銭六百匁入ル
〆金壱両壱歩
代銀八拾七匁弐厘

銀三匁四分　髪油代
七月
同五匁　秀岩寺施餓鬼料
四日
金壱両　御仕込方
十三日
銀七拾三匁　伊兵衛様与内懸り銀

金三歩　焼物代
六月廿五日
同壱歩　もと女渡
七月廿九日
同弐両　御月割
八月九日
同三歩　炭薪油代
同弐歩　御仕込方

同壱両　利助恩扶
同三歩　利三郎右同
〆金七両
惣〆銀拾四貫五百四匁壱分六厘
さし引
惣銀八百五拾三匁八分弐厘

七月分月割六月廿五日納り
金弐両三歩
右者幸蔵借米ノ内ゟ納ル
六月廿五日
同三両　御法事用
右同
同弐歩　兵吾様渡
右同

同壱両　　御救用
右同

同壱両弐朱
右同
正銭七百拾五文
〆銀壱貫四百五匁五分
内
但幸蔵殿かり米弐拾俵代銀
銀六百六拾弐匁
右者六月直段代銀三拾三匁壱分かへ
差引
銀七百四拾匁三分五厘
九月九日
一金弐歩　　御仕込方渡
一銀拾七匁三分　　焼物代
亀五郎渡
一同四拾壱匁弐分五厘　御籠用

八月十三日
一金弐部弐朱　講懸金
一銀拾匁　半桶代
一金壱両　女中恩扶
〆銀弐百六匁七分七厘　以上
〆銀九百四拾九匁七分弐厘　以上

寛政元酉歳

川古秀岩寺境内杉一件控

六月十四日

円応寺

役寮

(2)

（一項）一六月十三日役所[1]ゟ役僧[2]御用申来差出候処、秀岩寺境内杉弐本御用ニ相成候条、此段秀岩寺へ申達可仕由被仰渡候

（二項）一十四日秀岩寺へ差紙[3]を以右杉之儀申達候処、即日ハ印形[4]在合不申ニ付、手紙ニて被相断、翌十五日使僧を以請之印形被致候事

（三項）一秀岩寺由緒書岡部庄屋[5]ゟ秀岩寺へ相渡候手覚書當寺役[6]某迄持参被致、尚又口達ニ而秀岩寺森一式[7]岡部十郎右衛門殿支配所ニ而候由庄屋ゟも申達候段、役寮迄住持[8]潮宗被申入候、右由来書写取置申候

（四項）一先年[9]武雄ゟ杉御用ニ付伐取被仰付候処、客殿風除ケニ立置候段、住持柏岩代ニ被相願、依之山方役所迄右之趣申上候処、願之通浦田江五ゟ山方役内[11]ニ被差免、右免状[12]并本山ゟ副翰[13]ニ而住持へ被仰渡免状両通秀岩寺へ相渡置候、右本書此度御用ニ付相尋申候処、先住亀峰代[14]紛失仕候段隠居鏡圓[15]呼出之上被申達候、右ハ鏡圓老之代、本山ゟ副寺典座秀岩寺住持立合ニて写取ニ相成居候、右本書紛失ニ付、鏡圓隠居ゟ痛入[16]之書付書印ニて請取置候、右本書ハ當寺先住大願和尚代也、秀岩寺隠居呼出八月二十一日

（五項）一秀岩寺由緒書[17]并鏡圓隠居痛入手形別紙ニあり

(4)

（六項）一九月六日寺社方御用申来、役僧罷出候処、秀岩寺へ口達書を以申達之内、御用被仰渡、別紙口達書あり、同八日川古村於清正寺ニ浄圓寺典座[18]立合ニて秀岩寺へ申達置候事

（七項）一同十二日秀岩寺潮宗被罷出申達被致候者此度境内杉黒印之内壱本其外之杉[19]岡部役者ゟ伐取ニ相成、尤拙僧へも断無之、尤寺整ニ付他行留主故帰寺之上ニ右之様子見請候ニ付、此段御達申上候与有之、右ニ付、十三日寺社方勝[21]之允殿宅罷出、右之段申達候

（八項）一同十五日秀岩寺潮宗長老呼出[22]、手覚書出庄屋へ返心御座候通、口達幷口達書を以申達候一件相尋申候処、庄屋元へ懸合仕置候得共、未返答差分り不申候由被申、尚又承合口達書を以御達可仕可申由ニ被申候事

（九項）一隠居鏡圓和尚手形ニ奥印被致相納り申候事

（十項）一先年典座瑞岩代秀岩寺へ被罷越、武雄御私領畝数之儀八太夫立合を以被相改、右畝数書付持返り寺社方へ被相納候、手数通之儀、現住潮宗長老も御同席、右之段承知御座候哉と為念潮宗長老迄相尋申候処、於此儀ニ者拙僧者一向存不申元より其座にも同席も不申由被申候事、尤内々を以相改申候

校注

（1）六項九月六日条に「寺社方御用申来」とあり、役所は本藩の杵島郡横辺田代官所寺社方と思われる。

（2）円応寺に役寮があって、寺務を司る僧で、円応寺は曹洞宗本山にて宗務を司っていた。四項に副寺典座と録され、九月六日条に浄円寺典と録される。役寮を司る首座は副寺を兼ねる浄円であり、十項に先代の典座瑞岩と録される。

（3）役所より命令された理由事項を附し、出頭を促す書状或は承諾を促す書状の類。

（4）うけはんともいう、差紙を以って示達された内容を承認し押印して責任を負う承諾書。

（5）寛政元年の岡部領川古村西分村（皿宿下村）は庄屋藤兵衛、村庄橘右衛門、村横目久助である。

（6）円応寺役僧某とあるのは浄円である。

（7）岡部十郎右衛門利宣は西岡部治左衛門利政系五代目で、岡部家が知行地に川古村を与へられ支配した最も古い記録である伏戸神社棟札に「寛政元年辛丑十二月領主岡部宮内小輔源重利改造」と録されている。

鍋島勝茂が慶長十年五月岡部内膳正長盛の女高源院を家康の養女として娶られたので、宮内重利は御附頭として肥前に下り、勝茂に取立てられ岡部姓と知行千石を与へられた。忠直の御側役、光茂の御年寄役と大物頭を勤め、藩の大身となった。二代目は七之助重政で、三代目に東と西に分れ、川古村東分を権之助、川古村西分を治左衛門が知行した。西四代目善左衛門利旨過ち有って明和四年十二月知行召上げられ御蔵入となった。明和七年夏十郎右衛門城中に召され、弐百五十石を拝領した。庄屋日記一二〇項には、「一当村之儀、前載之通御西内岡部善左衛門代無調法有之、御知行被召上

御蔵人ニ相成居候処、去ル明和七年寅夏当十郎右衛門様御用ニ付御登場被遊候処、弐百五十石拝領被仰付、則寅秋之儀御知行代米御筈人ニ而高木御屋敷御相続被成、翌卯秋川古村地米弐百拾八石七斗三升壱合、神埼郡小津ケ里地米三拾壱石弐斗六升九合地床相渡、則卯秋御屋敷6右両村御支配被成候ニ付」と記載している箇所がある。因に荻生徂徠は、訳文答蹄は、過ちを「悪の心なきを過と言ひ、過の心あるを悪と言ふ。しそこないの禍になりたる也、然れども悪心より出たることにてはない」と定義している。過有て一罰有て、無調法又は差支へと言ふ用語には原因が伏在されるものである。秀岩寺が岡部家の支配所であることは、秀岩寺十七世雷応恭伝和尚が嘉永六年三月一日より七月十五日迄近隣の僧を集めて、回向勤行のため願書を岡部庄屋佐七及び三太夫へ差出し、両庄屋奥印を以て岡部代官所へ差出されていることよりうかがえる。弘化四年未十月、武雄領川古村庄屋八助より武雄代官所へ差出された「武雄内川古村現在地改帳」に清正寺並に清流院は武雄領で円応寺の末寺と報告されているが、秀岩寺は所載されていない（武雄市保存文書）。最近秀岩寺屋根改造の際に発見された棟札にも「川古村領主岡部七之助利実」と記載され、秀岩寺が岡部家の支配所であったことが実証される。八助は堀通大内家の先祖である。

（8）住持潮宗秀岩寺十世洞源潮宗和尚である。

（9）住持柏岩鏡円長老代に、武雄鍋島家山方役所より秀岩寺客殿風除ケに立て置かれた杉御用を仰付けられた。

（10）住持柏岩秀岩寺六世柏岩意和尚は天明三年正月三日入寂されており、安永七年七月より安永八年四月の間と推定される。

（11）山方役所川古村地内山林原野は武雄領であり、川古村には二名の山方庄屋が置かれていた。庄屋日記宝暦十三年の項に武雄領山方庄屋長左衛門・同八太夫と録されている。

（12）免状武雄山方役所に杉伐り取りの中止願書を差出したところ免状を下附された。

（13）副翰は保証する文書のこと、山方役所より下附された免状に、円応寺本山の副書で免状の内容を保証する文書がある。

（14）先住亀峰は秀岩寺七世慧燈知山和尚と推定される。

（15）現在は隠居して鏡円・亀峰代には次代の住持を約束された役僧で、鏡円老とは長老の略称と思われる。

（16）痛入の書付とは、痛み入るは恐れ入るまたは恐縮するの意に用いられる。隠居鏡円が八月二十一日に円応寺に呼出され、柏岩代に渡された山方役所の免状と本山よりの副翰両通は亀峰代に紛失したので詫状を差出した。

（17）此の由緒書が被見出来れば、秀岩寺中興以前の開基時代の歴史が解明できる重要な資料であることは疑ひないが、今後の考究に待つ。秀岩寺開基秀岩代並に開山了然和尚代の歴史は諸説があることを附記して置く。

（18）六月十三日に次で、再び寺社方より口達書を以って杉御用を達示された。

(19) 円応寺役僧浄円寺社方の口達書を持って、八日清正寺まで出向き秀岩寺へ渡した。

(20) 岡部役者佐嘉御屋敷より出向された役人と思われる。庄屋日記に、坊山たちへ岡部領の代官所を置かれ、貞享三年より明和三年まで代官交代を記録されている。明和八年十二月条に、御代官田中弥右衛門と録され、安永二年六月条に「御屋敷ゟ茂役人田中弥右衛門殿追々罷越」と記録されている事から、安永元年からおそらく代官所勤務は廃止され、佐嘉屋敷から支配されたものと思われ、本項の岡部役者と符合する。天保八年には井手家文書に「代官給清治殿渡シ」と記載され、代官所が復活されている。

(21) 潮宗より報告されたことを十三日役僧より寺社方役人勝之允へ報告された。

(22) 潮宗長老は次代の住持を約束された僧で長老と称するが、知徳ある住持和尚に対する敬称にも用いられ、本条の長老は後者の意である。

附記

岡部十郎右衛門佐嘉屋敷にて知行所支配することが出来ず、川古へ引越し城内より退去命ぜられたことと受取られ、庄屋日記一三二項の記録に「一御領主岡部十郎様御差支ニ付、佐嘉ニ而相續不被為叶ニ付、戌十二月廿六日當地御引越相成、御借宅庄屋次郎兵衛母隠宅新屋ニ御住居被成候、則亥春多ち江御造作被成、村中ゟ色々世話仕候事、寛政三年亥三月庄屋次郎兵衛代也」とある。家臣や領民が主人の非を記録するやうなことは禁じられており、御差支の用字は城内退去の原因を伏在する表記である。川古へ引越した原因が秀岩寺黒印された杉一本伐取られたことにあるように思われる。

秀岩寺歴住（秀岩寺記録写）

世代	住持名	示寂年月日	西暦	世代	住持名	示寂年月日	西暦
開山	了然	天文二十年八月十日	一五五一	十四	大応全龍	文政七年十月十一日	一八二四
二世	中興玉淵	宝永二年五月四日	一七〇五	十五	虚堂大達	天保二年十二月九日	一八三一
三	雲外鷲大	寛享元年八月五日	一七四八	十六	普寂大賢	文久元年八月十四日	一八六一
四	大瑞鳳林	宝暦元年十一月二十四日	一七五一	十七	雷應恭伝	慶應元年四月十日	一八六五
五	支岩	安永八年四月二十九日	一七七九	十八	海庵大龍	明治二年六月十六日	一八六九
六	柏岩意	天明三年正月二日	一七八三	十九	月山悟	明治十一年十二月五日	一八七八
七	慧燈知山	安永七年七月十日	一七七八	二十	玉峰大栄	明治二十四年十二月二十八日	一八九一
八	祖圓大	寛政六年二月二十六日	一七九四	二十一	雲山龍渓	明治二十六年五月二日	一八九三
九	玉海峯大	天明六年四月十九日	一七八六	二十二	洞外良雲	昭和十七年六月七日	一九四二
十	洞源潮宗	文化三年九月八日	一八〇九	二十三	機外大雄	昭和十七年四月十二日	一九四二
十一	枢山大機	文政七年正月十五日	一八二四	二十四	宗玄大徹	昭和四十六年五月二十六日	一九七一
十二	龍雲恭吟	文化十二年七月六日	一八一五	二十五	道光荘禅	昭和三十四年二月二十六日	一九五九
十三	雲山仙渓	文化十三年四月二十日	一八一六	二十六	現住鳳雲	和尚代 ——	

附　記

秀岩寺住持より圓應寺住持へ転任された和尚も多い。二十二世洞外良雲和尚もその一人で、圓應寺参道の桜並木は、大正三年良雲和尚が植へられたものである。

秀岩寺過去帳第一号最初の書き初めが享保五年五月二十四日となっている。元禄初年頃の調べに、圓應寺末寺に秀岩寺も記載されてあり、檀家の過去帳に元禄頃から秀岩寺の檀家である事を多く見受ける。聞く所によると、秀岩寺火災により焼失したといわれる。秀岩寺久しく廃絶していたのが、玉淵和尚によって中興されたが寺は焼失し、更に雲外鷲大和尚の代に再建されたものと推定される。西岡部家初代治左衛門代の頃である。

秀岩寺境内杉一件控の校注（7）に引用した庄屋八助、並びに大楠満武家文書安政五年三月及び元治二年一月二日づけの川古村某の土地賣渡証文の奥印に証明されている庄屋八助は、堀通大川内家過去帳に「大川内八助事天保十一年より慶應元年迄二十六年庄屋役を勤む」と記載されている。

秀岩寺杉一件控第十項の八太夫は、川古庄屋日記一〇七項に武雄山方庄屋八太夫と出自している。元禄十七年大川内家過去帳に「大川内初代八太夫庄屋役を勤む」と記載される。また庄屋日記一四一項弘化二年秋伏戸神社修理条に「東分庄屋清太・西分庄屋仙蔵代、武雄領庄屋栄蔵代」と書載されている。以上三者は堀通大川内家先祖である。満武家文書の中で嘉永四年・同五年・文久三年の文書に庄屋鶴之助と記載されている。鶴之助は道手松尾家の先祖で、武雄領庄屋である。大川内家と松尾家は、武雄領内で下村に住した。下村は幕末期に作られた色彩絵図面によって詳細に知ることが出来る。（校注・附記　満武）